

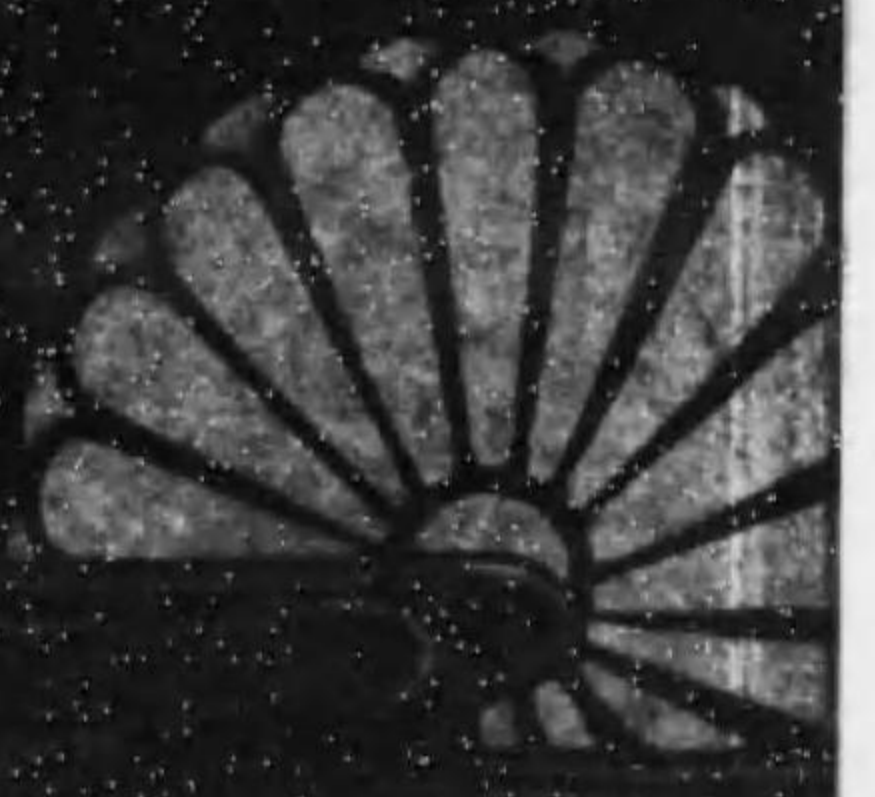


始



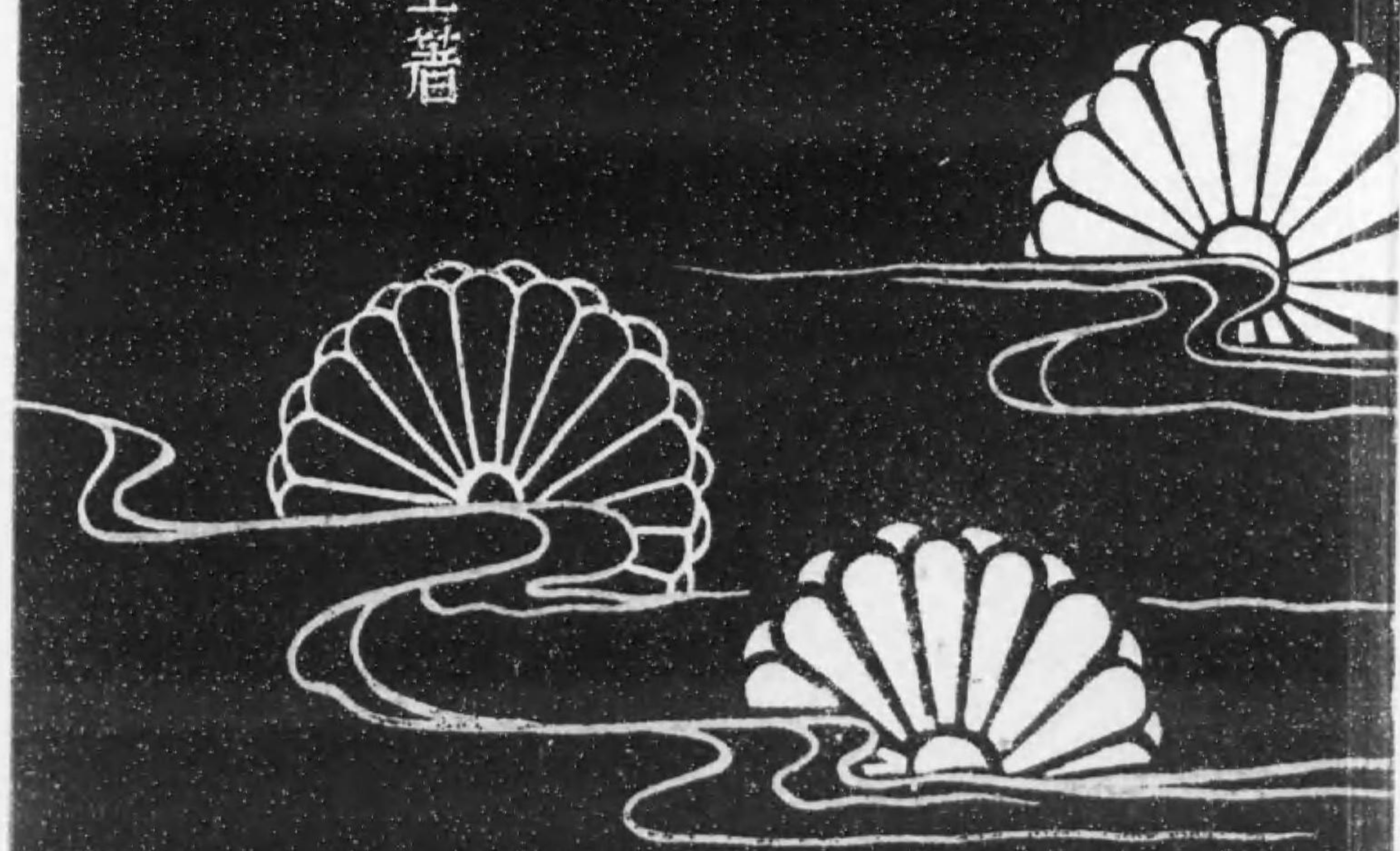
大楠公

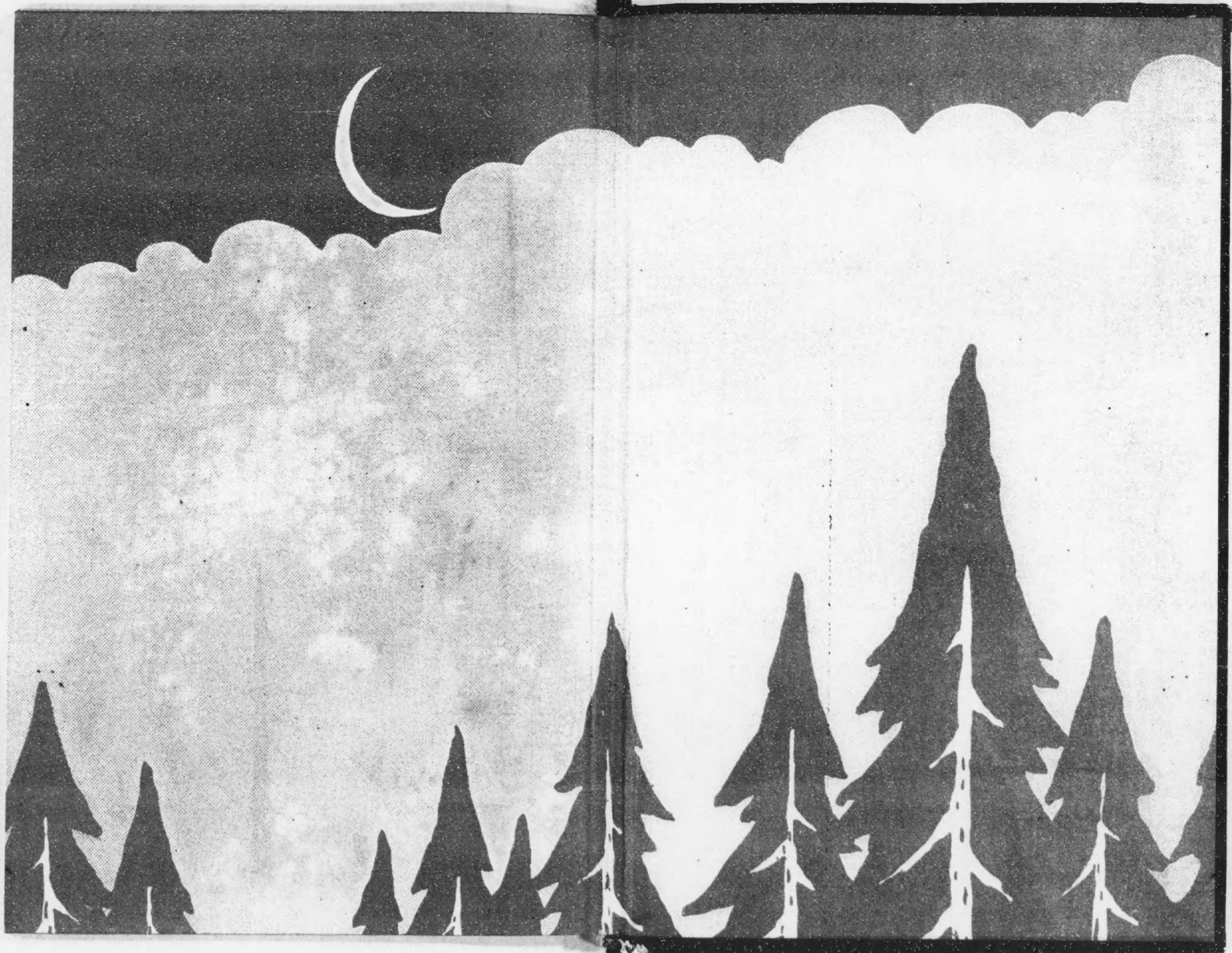
小林 隆 里 著



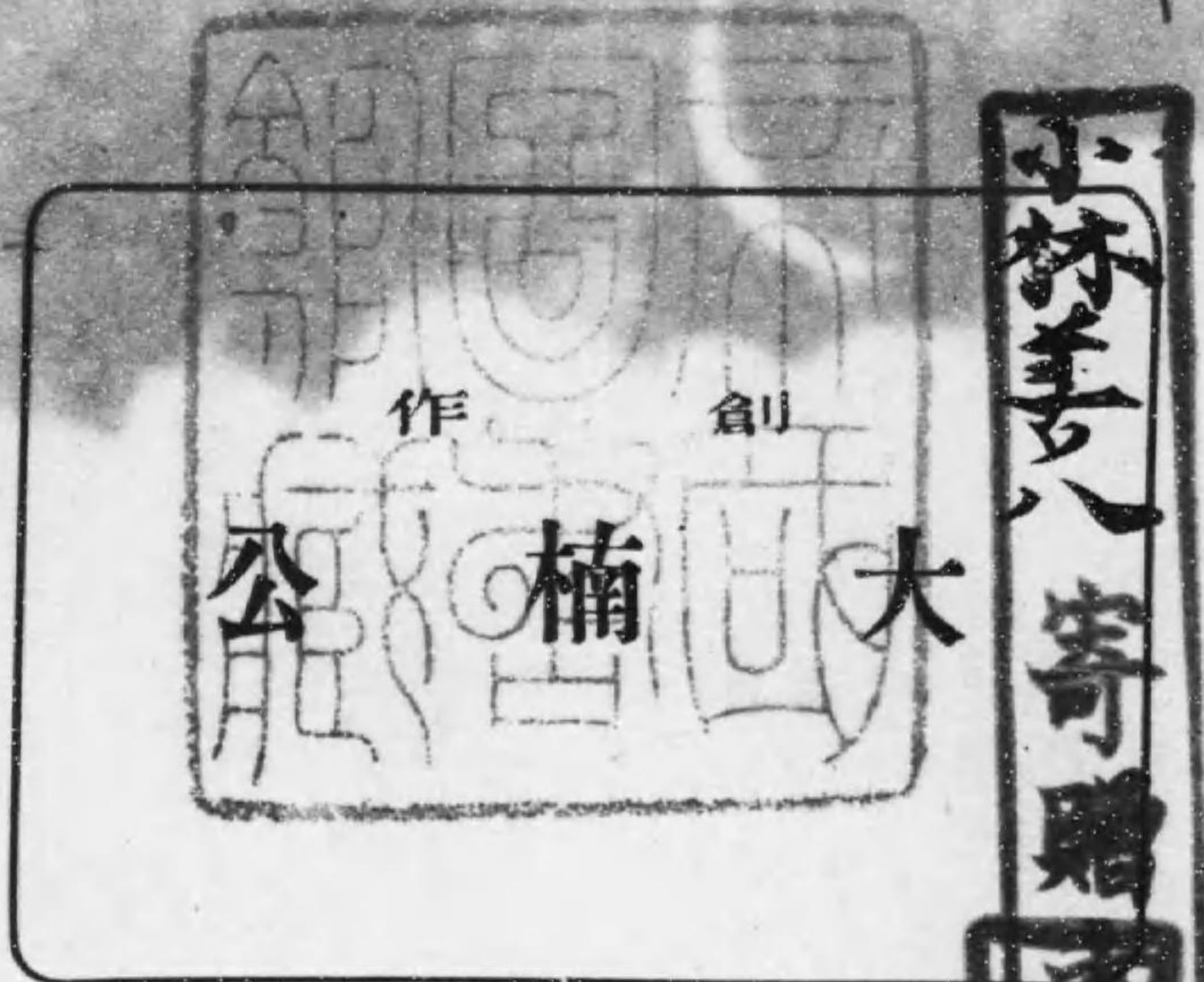
大楠公

小林鶯里著





特109
4172



大正製糖株式会社
寄贈
16/7

大正
12.7.28
寄贈

16/7



序

忠孝の本目が年々に遠ざかる現代思想の悪化は一般の慨歎する處、本書は大楠公一代の偉業を史實的、通俗的に筆を進め、一般家庭に向つて此の日本魂の具體化せる、建武の大忠臣を偲ばしめんとの素志より公にしたものである。

七月十二日湊川神社祭の日

小林 鶯里

文藝社史傳小說

高山	大德	八真	日豐	曾新
山鹿	鹽川	田運	我田	田義
彦素	平八	幡幸	太兄	弟貞
九郎	行郎	康船	村人	閣弟
小林	小林	小林	小林	小林
鷺里	鷺里	鷺里	鷺里	鷺里
著	著	著	著	著

大楠公

小林鷺里

(一)

大楠公

古い木立に深い神秘を隠して居る信貴山の奥に毘沙門天の社が神さびて寂しく建てられて居る。そこらに雑草は生ひ繁り木の葉は深く埋れ、晝も尚ほ薄暗く、怪しき鳥や獸の鳴き叫ぶ聲が彼方の森から此方の森に響いて居る、秋の夕日は木の間に洩れて社の屋根を斜めに照らし四邊の光景は一層寂しかつた。

今しも麓の方から坂路をトボくと上つて来た一人の婦人は、二人の侍女に傳づかれ、神殿の前に額づき、

「やよ毘沙門天の御神、吾等に一人の子を授け給へ」

と熱心に祈つた。顔には寂しい憂ひの色が曇つて緑の髪が簀れて居る。聽て其の女は再び侍女に伴れて麓の方に下りて行つた。此の女は河内國赤坂村、赤坂館の主楠木正遠の妻であつた。正遠は今年三十一、夫婦の間に未だ一人の子もなく、二人が夕餉の膳は寂しかつた。それ故妻は附近なる信貴の毘沙門天に日參をしたのであつた。或る日赤坂の館に、温かき日光は縁側に流れ主正遠は奥の座敷に

縁の障子を明けさせ、妻と相對して座て居た。此の時妻は、

「喃吾が夫、昨夜妾は不思議の夢を見申しましてじや」

「そは如何なる夢を」

「さればでおじやります。妾は毎の如く毘沙門天に詣り申しました。そして妾は知らず神殿の前でウトウト眠りました。スルと何時の間にやら人が来て妾を起しました。妾はフト眼を醒すと、妾が前に一人の神が立ちまいて汝が日頃の信心に愛で、一人の子を汝に授けんと申しまして、神の御姿は何處へか見えなくなりました。スルと今度は前髪の可愛らしい稚子が一人妾の前に立て居ります。妾は此

の稚子こそ神が授け給ひし子と思ひまいて直ぐと抱き上げ様と思ひ
ました。スルと其の稚子も又消えてなくなりますると、妾は夢は醒
め申しまいてじや……」

正遠は黙して聞いて居たが、只微笑を洩らした許りで何とも云は
なかつた。然し其の後間もなく妻は妊娠した。そして一日妻は、

「喃吾が夫、妾は什うやら妊娠いたしまいた氣な……」

「お、左様か」

二人の面には強い喜びの光が漲た。其の後漸く其の年も暮れ翌
年の春、事無く妻は健かなる男の子を産だ。二人の喜びは實に言の

葉の外である。妻は、

「こは全く信貴の毘沙門天様のお蔭でおじやります」

「お、さうじや、全く毘沙門天の授け子であらう」

二人は全く毘沙門天の儲け子として名を多聞丸と命けた。之は毘
沙門天は又多聞天と云ふからである。

斯くて赤坂の館には柔かい春の光と共に、一家の内には暖かい喜
びの光が充ち溢れた。そして此の光は赤坂館に楠木一族の喜びの光
のみではなく、河内一圓、後には吾が日本の光であつた。

夫婦の者が愛育怠らぬ間に、多聞丸は春の若草の生ひ立つ如く生

長して己に六歳となつた。此の頃彼れは智と力に勝れ、既に非凡なる神童であつた。未だ六七歳の小兒にして力は十五六歳の子供に勝て居た。そは常に彼れが十五六歳になる、若黨等の子供と相撲をとつて一度も負けた事はなかつた。そして智も又非凡にして若黨等を伴れて屢々彼れが不思議なる智慧を現した事もある。

(二)

春の日は長閑に温かく、赤坂村より程遠からぬ天王寺なる古刹の庭に柔かい日光は静かに降り濺ぎ、参詣の人が多く出て居た。其の中に若黨二三人に傳づかれて前髪の稚子が一人雜じつて居た。此の

寺の庭なる西南の隅に、巨きな古い梵鐘が昔より釣るされて居る。今此の稚子は供なる若黨に向ひ、

「やよ汝等の内、彼の梵鐘を動かし得るものあるや」

「さればでおじやります、彼の巨鐘は吾等如き二三人寄るとも動かすは難づかしい事でおじやります」

此の時彼の稚子はカラ〜と笑ひ、

「汝等は彼れなる梵鐘が動かぬと申すか、さらば身が一本指にて動かして見せうづ」

と云ひ乍らバラ〜と彼の巨鐘の許に馳せ寄り、一本の指端を梵

鐘の縁に當てグツと一押しした。けれども鐘は微動だもしない。人々は心に到底も不可なる事と考へて居た。稚子は再び指端に力を籠めてグツと押した。そして力を緩めて又押した。斯くて稚子は指端に力を籠めては押し、押しては緩め、稍々一時許り絶えず押した、此の時鐘は細かい微動を始めて起した。尙も稚子は休まず押して居ると、鐘は次第に大きな波紋を描いて動いて来る、遂には稚子の細い指先きに押される度に大きな波状を以て前後にグン／＼と唸りを生じて動き出した。此の時若黨を始め人々はアツと驚いた。此の様子を始めより人々の後ろに尻と眺めて居た一人の僧は何か頼りに首

點づいて居た。此の稚子こそ彼の多聞丸で、僧は後に多聞丸に朱子の學を説き四書を講じて大義名分を教へたる觀心寺の住僧瀧覺坊聖瑜であつた。

これも同じ頃の事であつた。夕日は靜かに赤坂の館に暮れ、燭光に明るく照らされたる奥の座敷に主正遠は一人の客と相對して、四方の物語にふけて居た。此時客は、

「サテ正遠お聞きやれ。今度某は都なるさる宮家に招かれて御奉公致す事になり申しました。されど御存知の如く某は素より田舎武士にありまいて、宮方に對する禮儀作法少しも知り申さず、實に

困りまいてじや。正遠殿よき智慧にてもおりやらぬか……少しく教へ給はれ」

「さればでおじやる。身も又田舎武士、之は如何いたしてよからうづ……」

「某 ホト／＼困り申しました」

二人は暫し思案に暮れて居た。けれども好き智慧も出なかつた。

此の時襖の蔭より静かに出て来た稚子は、主正遠の一子多聞丸であつた。そして多聞丸は徐ろに、

「サテ父上！客人！。童は凡てを襖の蔭にて聞きました。童がよき

智慧お貸し申さうづ」

正遠は、

「コレ多聞丸。吾等二人にさい解らぬもの、如何で其方に解らうか。却て客人に無禮じや彼方へ行きやれ」

此の時客人は、

「正遠殿お咎めあるな。童と雖も如何なる考へか候はむ。多聞丸殿耳寄りな、何事か一つ聞かして呉りやれ」

「さればにて候客人！。御身もし都に出で、宮家に仕へなば、先づ宮様の愛する家臣を見候へ。而して御身も彼れが爲す所に做ら

へなば必ず御身は宮の愛を受くる事に候はむ」

之を聞いたる客人も正遠もハタと膝を打て其の言の葉に感じ入つた。客は、

「正遠殿！サテ／＼御身は幸福せな、斯る賢き子をお持ちやれて：あゝ愛い稚子でおじやる。行末は御身にも優さりて好き大將になり申さうづ」

客は多聞丸を賞めちぎり喜んで歸た。此の時多聞丸は九歳の稚子であつた。

それより多聞丸は赤坂村の附近なる、彼の觀心寺の住僧瀧覺坊聖

瑜の許にあつて、孜孜として文學兵法の道を修め、朱子の學、四書の講義にはよく大義名分を明かにし、後世正成が勤王の志を養ひ楠氏三代忠義の基となつたのである。彼れが十二歳の時、父正遠は領土の争ひより隣郷八尾の別當顯幸と戦つた。此の時彼れは父の軍に従ひ初陣の功を現はした。

(三)

赤坂の館に腥雲の氣は満ちて、主正遠は家子郎黨を集め寄り／＼協議怠らなかつた。今しも奥の座敷に主従額を鳩めて打語らひ居る折りしも一人の郎黨は狼狽たゞしく此の座敷に這入り來り、

「吾が殿に申し上げます」

「何事である」

「只今敵地に入り込みし間者戻り來つて、殿に言上する事の候由」

「早々其の者を此處へ呼ばれよ」

早速に彼の郎黨は件の間者を伴ふて再び這入て來た。正遠は、

「間者の者太儀なるぞ。して敵の様子は如何ありつるよ」

「殿御油斷召さるな。敵は近國の兵二千五百餘人を集め大將別當顯

幸自ら之を率ひ此の城に攻め寄せんとし、早や神達の邊まで押し寄

せ其處に陣取て候」

之を聞いたる正遠は、

「スワ者共！速かに其の手配ないたせ」

と云て自ら出陣の用意をいたして居た。此の時多聞丸は漸く十二

歳の稚子ながら自ら父の前に進み出で、

「父上！此度の合戦には此の多聞丸をも味方の軍に召し伴れて候

へ」

「汝幼少の身にありながら健氣なる言を申す者かな。されど汝は未

だ三五の歳にならざれば出陣は尙暫らく見合すべし」

「さはれ父上！合戦は年齢によつて仕る可きものに候はず……是非

先陣に加へ給へ、多聞丸必ず初陣の功を建て候はん」
 と強いての願ひに正遠は味方の精銳三百を與へ先陣の列に加へしめた。

多聞丸は大いに喜び、直ちに部下の者共を集め、之に謀りごとを含め各々百姓、小商人に姿を換へしめ、菓子、酒、野菜等を持って敵の陣中に入り込ましめた。斯くとは知らぬ敵の者共は軍陣に疲れ、食に飢えたる所より皆之等を買ひ求めて空腹を満たした。彼の百姓小商人等は各々品物を賣り盡して皆其の場を立ち去た。そして彼等は遽かに姿を換へ鎧甲に身を堅め、陣太鼓の響と共にサツと菊水

の旗押立て、大將多聞丸は小櫻絨の鎧に菊水の紋縫ひたる陣羽織を着流し、頭には立烏帽子を頂き銀蛭卷の小長刀を小脇に抱き馬上に跨り軍扇探て真先に敵の陣中に入り出した。敵の勢は此の有様を望み遽かに得物を探して向はんとせしが、之は如何に不思議や彼等の身體は痲痺れて自由を失た。之は先きに多聞丸が部下の者をして百姓小商人に變装せしめて賣り込みし食物に、毒を入れてあつたのである。斯くて敵の亂るゝ足許につけ入り多聞丸は三百の精銳を率ゐて無二無三に敵の陣中に馳け入り、縦横無盡に敵勢を馬蹄に蹴散らした。此の時敵の陣中より黒糸絨の大鎧に三柏の前立たる甲を頂き、

白毛の馬に金覆輪の鞍を置き太刀おつ取り、

「いで敵の大將に見参」

と呼ばはつて現れた一將がある。多聞丸は小長刀を以て之に亘り合ひ、首尾よく敵の首を上げた。之は當日多聞丸が初陣第一の功名であつた。斯くて彼れは散々に敵軍を追ひ散らし夕日に菊水の旗翻へし、揚々として赤坂の館に歸て來た。

赤坂館の樓上に燭火は明るく凱歌の人の顔を照らし、父は其の功を激賞し、母は多聞丸の無事を喜んだ。外に夜風は吹いて楠木の旗は翻へつて居る。折々歡呼の聲が闇の中に洩れて來る。

後多聞丸は十五の時より加賀田村なる大江時親に師事して、尙文を修め兵法を學んだ。此の大江時親は大江匡房の後裔にして文武に精通し殊に兵法に長じて居た。多聞丸は彼れに師事する事數年、後に彼れが北條、足利の大敵を引受けて屢々之を惱し得たのも多く此處に起因して居る。

此の頃天下に暗雲横はり、京都と鎌倉の間には漸く密雲が低く垂れて居た。

(四)

承久の亂以後鎌倉幕府の朝廷に對する横暴は益々極まり、朝廷に

於ても幕府に對する御鬱憤は愈々激しかつた。

文保二年二月十六日、後醍醐帝は大覺寺統より出で、皇位を繼がせられた。そして主上は御胸の中に潜かに鎌倉に對する御鬱憤を抱き時機の到るを待たせられた。

此の頃主上は皇子若宮護良親王を東宮に立てさせられんとして居た。然るに持明統なる後宇多法王は後二條帝の皇子邦良親王を立てんとし給ひ密使を鎌倉に下し、幕府も之に賛同し主上の意に反して邦良親王を東宮に立てさせられた。主上の御鬱憤は己に抑へられなくなつて、九重の奥深く主上は密かに日野別當資朝、藏人内記俊基

の二人を召されて、鎌倉に對する謀議を廻らした。

一夜宮廷の夜は更けて、衛士の焚く火の冷く輝く外、禁裏の内外寂として聲なく、四邊等しく静かなる眠りに入れる時、此處は主上の御座所に未だ御寝もならせられず、煌々として明るき御座所に主上は只資朝、俊基の二人を御側に仕させ着座せられて居た。主上は彼等二人とヒソ／＼御密謀の末、いと御面は憂れひの雲に曇らせられて、

「鎌倉の惡逆なる天は其の無道を惡み、此の度兵を擧げ幕府を亡滅し、高時を誅罰せんと欲す、如何にせば彼等惡逆を亡滅するを得む」

此の時兩人は畏みて、

「御詔にて候。幕府の悪逆、高時の横暴無道恐れ多くも主上を蔑にし下は萬民を塗炭に苦しむ。今主上錦旗を翻がへして幕府を亡滅し高時を誅し下萬民を救ひ給はんの御叡慮の程忝けなく賢こそ候。然れども今鎌倉の勢ひ盛んにして之を討たん事容易の事に候はず、然れども如何でか之を打ち捨て置く所に候ふべき。聞く所に依れば鎌倉は元寇の役に多く財寶を失ひ内政紊るゝに拘はらず、彼れ高時暗愚にして少しも政を省みず、日夕酒宴に耽り、婦女に戯れ、内管領長崎高資一人政を恣まゝにするとこそ承り

候へ。而して高資又私利を貪り公事を省みず。之は先つ頃の事とか、奥州の安藤五郎同じく太郎なる兩名所領の争ひより鎌倉に出で、訴訟を起し候處、高資は二人の者より賄賂を收めて訴訟を決せず、爲めに彼等兩人は所領の地に歸りて亂を構へて候。然るに鎌倉よりは打手の勢を上げし下だし候へ共よく平ぐる事能はざりし由にて、早や鎌倉も末運近くどこそ覺え候。そのみならず攝津の渡邊、紀井の安田、大和の越智等の一族も此の頃漸く鎌倉に叛き、各々其の所領に亂を起し候由。又諸國にも鎌倉に恨を抱く者多く事あらば亂を構へんとし、勤王の志漸く厚く美濃國の住人

士岐十郎頼貞、多治見藏人國長等を始めとし足助次郎重範、錦織判官代俊政、石川義純親子の面々皆、主上兵を起し給ふと聞かば急ぎ御味方の軍に馳せ加はるべき者共に候。されば之より臣等兩人諸國に修行し主上の宣旨を傳へ、御味方の軍を唱へなば如何でか鎌倉を滅ぼさん事難く候べき、希くば叡慮を安んじ給はん事を」と奏上し、尙密々と何事か打ち謀らふ所ありてか暫しが間聲も打ち潜み、夜は次第に更けて行つた。此の時主上は御面に強き決意の光輝き給ひて兩人に固き御決意の程を宣はせられ、なほ、「それ、卿等よく之をはかれ」

と宣はせられた。二人は畏みて、「さらば臣等二人は之より直ちに御暇を賜はり、諸國勤王の士に宣旨を傳へて、速かに御味方の軍を唱ひ申し候はん」と奏上して御前を退いた。斯くて資朝、俊基の二人は山伏行者の出装に諸國修行の體に装ひ五畿内より次第に東國の方に行脚して、旅の衣に風寒く、野に伏し山に宿かりて、諸國を巡り、勤王の士を訪ねて宣旨を傳へた。それより間もなく、美濃國の豪族士岐十郎頼貞、多治見藏人國長等の面々密かに都に上りて身を忍ばせた。

(五)

主上の御謀も已に近く事を擧げられんとせし折、之も同じく勤王の軍に召されたる者の中に土岐頼春なる者があつた。彼の女房は當時六波羅の奉行齋藤利行が女であつた。然るに主上の御隠謀に與る頼春は此の頃頻りに公卿の館に出入し、屢々夜更けて家に歸る事もあつたが彼れが妻は嫉妬の心密かに小さき胸を痛めて居た。或る夕彼の女は夫頼春の遅く歸らざるに一人寂しく悶えて居る折柄、頼春は微かなる醉心地に歸て來た。妻は嫉妬の胸に悲しさ恨めしさに堪えられなくなつて來た。そして頼春に向ひ、

「喃吾が夫、此の頃常にあらぬ御不在に、夜なく遅く歸り給ひ、毎も御酒を召されて……何處方へお越しにてか、實に心懸りな……あゝ妻の心をお知りやらぬか。恨めしうおじやります」
と掻き口説いた。頼春は、
「ホー妻よ、何も怪しうはおじやらぬ。今宵は日野中納言殿の御館に招かれ、お歌の會に思はずも遅うなつてじや」
「否とよ吾が夫、如何にお歌の會とは申せ、斯く夜も静まりて更くるまで、又一夜ならず夜なく重ねての御事……お隠し召さるな、恨めしうおじやる」

と泣き崩なづおれた。此この時とき頼春よりは、

「さばかりお身みが思おもふなら、眞實まことを明あかし申まをさうづ」

と云いひて、遂つひ女房にようぼうの愛あひに惹ひかされ。主上しゆじやうの御隠謀ごひんぼうより己おのれも御味方みかたに加くははり、さては毎夜まいよの如ごとく日野中納言ひのちうな資朝すけともの館やかたに參集さんしゆし夜更よよけて密ひそかに謀事ぼうじを打うち合あはす事ことを物語ものごとつた。そして尙彼なほかれは決けつして他た言ごんいたすなと申まをし渡わたした。

之こゝを聞きいて妻つよは漸やうやくに疑うたがひを霽はらしたけれど却かへつ前まへよりも悲かなしき苦くるしき事ことが浮うかんで來きた。それより彼かの女によは、

「あゝ如何いかにせばよからむ……今いまにも合戦かつせん起おこりなば吾わが夫つまは主しゆ

上じやうの御軍おんいくさに、又また父齋藤利行さいとうとしゆきは必かならずや鎌倉かまくらに義ぎを盡つくして幕府ばくふの軍ぐんに從したがふならむ、さすれば夫をととと父ちちは互たがひに敵てき、跡あとに妾めかけ一人ひとりは如何いかにせばよき……ア、悲かなしき極きはみにこそ」

と小ちひさき胸むねに絶たえ入いる許かり歎なげいたが、果敢はかなき女をんな心こころに彼女かのぢよは遂つひに、

「いつそ此この事ことをば六波羅はろなる父ちちに打うち明あけて、妾めかけが苦くるしき胸むねを語かたりて訴うたへ、如何いかにもして父ちちをも主上しゆじやうの軍ぐんに引ひき入いれなば父夫ちちをとと諸共御方しよごみかたの軍ぐんに、せめて、妾めかけが哀あはしみも少すくなかるべき……」

と獨ひとり合あはさず、密ひそかに抜ぬけ出いで六波羅はろに急いそぎ父齋藤利行さいとうとしゆきに泣ないて

此の事を物語た。利行は此の事を聞いて打驚き、

「スワ鎌倉の一大事！」

と止むる娘を打ち捨て、時の探題常陸守知時に注進した。常陸守は大いに驚き、俄かに軍兵を馳り催して都に押し寄せ頼貞、國長等を襲はしめた。茲に頼貞、國長は已に事露はれぬと知りて自ら腹掻て死んだ。其の時日野別當資朝、多治見藏人俊基の兩人は六波羅勢に捕へられ資朝は佐渡の國に流され、藏人俊基は如何なしけむ、途中より逃れて都へ歸り來り身を潜めて隠れて居た。又此の時、主上は藤原宣房を幕府に下されて、此度の事、少しも主上の知ろしめさぬ事

であると云ふ告文を下されて一時事なき事を得た。

されど主上の御胸は尙安からず、雄々しき御心には斯る小さき御蹉跌に如何でか御心挫け給ふべき筈もなく、御鬱憤は益々高く、それよりは護良親王、宗良親王を始め奉り、法勝寺の僧正圓觀醍醐寺の座主東寺の長者僧正文觀、淨土寺の僧正忠圓等を屢々召され、又御側には北畠親房、吉田定房、萬里小路宣房など年齢高く智謀深き人々が侍べつて日夜謀計を廻らし、密かに鎌倉の様子を伺がひ、時機の至るを待て居た。

斯くて世は次第に暗膽たる黒雲に蔽はれ、行き來の雲は西に東に

密雲漸く低く垂れ下り、今にも雨を誘さんとしつゝあつた。

(六)

此の頃鎌倉にては執權北條高時政を怠り内政日に紊れつゝあつた。折柄六波羅より主上御隠謀の報傳はり一時高時は大に激して兵をさし上げせんとしたれども、主上の御告文に依り又聊か怒りも解けた。けれども尙心安からず種々詮議して遂に管領長崎高資の言に依り、主上を御位より下ろし奉り、東宮邦良親王を立てんとしたが、又邦良親王薨去の報に接して之も中止となつた。けれども高時は北條時益を北方六波羅探題とし、北條仲時を南方六波羅の探題と

して遣はし、朝廷に對し奉り少しも注意を怠らなかつた。

斯くても尙高時は素行を修めず、政を省みなかつた。そして日夜酒宴に耽り、各大名に申しつけ各國より美しき婦人を擇び出さしめ其の數も數十名、之等に各々歌舞音楽をなさしめ政治を司る幕府の内は酒の香に匂ひ歌絃の響に流れて日を暮らした。尙彼れは犬合遊などを好み、或る時は數十の犬を庭前に放ち其の咬み合ふ様を眺めて楽しんで居た。そして之等の犬を公犬と云て犬には様々なる飾をつけ輿に乗せ守護の行列をつけ、道行く人の之に遇ふ時は馬上の人は馬を下り、笠をとりて路傍に跪かしむるなど人民の迷惑一方な

らず、上下等しく其の悪政に苦しんで居た。

斯る折から、都にある吉田定房なる者より密使が来て主上再び御謀叛の義を洩した。之を聞いた高時が猛獸の如き残忍なる憤激の血潮は沸きかへて、直に之に對する評定が開かれた。

時は元弘元年夏、七月の末、鎌倉幕府評定の間に熱い風は吹き來つて高時は顔に朱を濺ひで控へて居る。傍らには管領長崎高資以下幕府譜代の大名ズリと居並らんで居る。此の時高資進み出で「此度主上の御隠謀についての評定、此の高資は先年土岐頼貞を討ち候節已に主上の御位を下ろし奉らんと存じ候へつるに、朝廷

の威を憚りて止みぬれば今斯く再び御隠謀の事こそ候なり。素と亂を治め、治をはかるはこれ武人の徳にてこそ候なれ。されば今速かに兵を差し向け主上を遠國に遷しまゐらせ。大塔宮護良親王をば不返の流罪に處し奉り。俊基、資朝等の亂臣を誅罰し又主上に與する公卿等をば、夫れ々々遠國に流してこそ然るべくと存じ候なり」と申し述べた。並み居る諸大名は皆肩を聳ばめた。此の時面を正して進みでたは二階堂貞藤であつた。彼は徐ろに、

こは高資殿のお言葉とも存じ候はず。素と右大臣家頼朝公天下の政權を掌握してより鎌倉は、既に百五十餘年、威は四海に及び繁榮

は一族子孫に及んで候。これ一重に鎌倉代々の執權に在はする吾が君の祖先皆天皇を上に載き下萬民を撫育し、以て上には忠、下には仁なりし故とこそ存じ候。然るに今主上を遠國に遷しまゐらせ、大塔宮護良親王をば不返の流罪に處しまゐらせんには如何でか天も其の無道を惡み給はざらぬ、必ずや天罰の末恐ろしくこそ候。又宮は叡山の座主に在はしませば叡山の僧徒とて如何でか之に叛かざるべき、されば神佛既に怒り人皆背かば武運は末危くこそ候。君々たらずとも臣以て臣たらざる可らずとは古聖賢の教へにこそ候。されば今朝廷を恐れ謹み勅命を奉じ候はんには、例へ主上御謀叛の思

召あるとも、鎌倉の武威盛んなれば主上に與する者の候べき、されば主上も必ず御志を翻へし給はん事必定に候。吾が君にも速かに御企を思ひ止まり、只管國家の太平武運長久を計り給はんこそ尤も至極と存じ候。

と貞藤は暗愚なる高時を訓へ且つ諫めた。此の時又高資出で貞藤の論を蔽ふた。高時は遂ひに高資の言を用ゐて軍兵を都にさし上せる事に決した。

夏の日も傾ひて、照り弱た夕日の光が斜めに鎌倉幕府の屋根の上、幕府の末運を哀しく照して居る。最早や高時の意は決せられ

た。都と鎌倉に横はる雲は俄かに雨を催し、世は益々怪しき闇となつて来た。

(七)

元弘元年八月二十四日朝の事であつた。多治見藏人俊基は毎の如く参内せんとて、玄關に下り立ち牛車に乗らんとする矢先き、何者とも知れず数名の武士バラ／＼と馳せ寄りて兩の袖を捕へた。俊基は驚き、

「予は藏人内記俊基なり、汝等近寄りて無禮いたすな」と答めた。此の時一人の武士、

「吾等は鎌倉殿よりの命に候へば、いで御供仕らん」と云つて其の儘何處ともなく引き去た。

此の時四邊は遽かに騒々しく、

「アレ鎌倉より大軍押し寄せたるよ」

「六波羅よりも數多の武士亂り入りたるよ」

「コハ如何なるか」

「俊基卿は已に捕はれたる事なるよ」

と人々は口々に罵り喧めいた。されども九重の奥深く、未だ何人も之を知る者はなかつた。

此の時一人の公卿はアハタ、しく馳せ入りて主上の御前に跪き
「只今鎌倉より大軍押し寄せ、六波羅よりは常陸守知時又數多の軍
勢を引き具して都の内に亂れ入りて候。而してはや多治見藏人俊基
卿には彼等の爲めに召し捕はれて候」

と奏上した。主上は一方ならず驚き給ひ、俄かに尊良親王を始め
奉り、萬里小路藤原藤房、中納言源具行、四條隆資、大納言藤
原師賢なんどの公卿を召し集ひて御評議ましましけるが、此の時大
塔宮護良親王も密かに参内しまつりて、

「此の度鎌倉勢の上洛は、父陛下を遠國に遷し奉り、此の護良を死

罪に行はんの結構にて候由。而して今宵彼等は此處に押し寄せん
とする由、之は御味方の軍の不利とこそ覺え候。されば父陛下には
御近臣一人をば、これに天皇の號をば許され給ひて叡山に上ぼらし
め、父陛下には此處を落ちさせ給ひて暫く奈良に御忍びあらせらる
べし、然らば護良は天皇臨幸の由を言ひ觸らし、鎌倉勢をして叡山
に向はしめ候はん。叡山の合戦數日に亘り、敵の勢疲れたらん頃、
伊賀、伊勢、大和、河内の官軍を馳り集め都に上り、鎌倉勢を攻め
られなば官軍必ず勝利にてこそ候。早々御用意候べし」
と奉奏あらせられた。主上は流石御親子の御情、親王の御上を思

召されて、いとゞ御涙にせきあひ給はざりしが、御側に在る藤房卿は斯くてあるべきにあらねば、

「親王の御奏聞、尤も至極と聞え候。今にも此處に軍兵亂れ入候は、由々しき一大事にて候。例へ今一旦此處を落ちさせ給ふとも、天道は如何でか無道を惡み給はざるべき、必ずや逆賊亡びて目出度御運の開け給ふ事、鏡に懸けて見るが如くに候。早々御用意あつて落ちさせ給ふべし」

と涙ながらに奏上した。主上も此の時、

「實にも」

と宣はせられ、それより内侍所、神璽、寶劍ばかりを御身に副へ給ひ、夜に紛れて落ちさせ給はんとせしが、此の時早や京師に雑兵は亂れ入り篝火を焚いて守りいとゞ嚴重なりしかば藤房の計らひにて主上は三種の神寶を抱かせ給ひ上より女房の衣かつがせられ、いぶせき女房車に乗り給ひて藤房、季房兄弟のみ御供にまゐりて三條河原まで落ちさせ給ふた後より追ひ奉れる公卿も皆三條河原にて主上の御車に追ひつき、これより主上は御車を捨てさせられ怪しげなる御輿に召し替へさせ給ひ、御供の公卿の面々も衣冠の装束を脱ぎ捨て、折烏帽子垂衣を着、田舎武士の姿にてお供をば仕つゝた。そ

して御供の面々には尊良親王を始め奉り、藤原藤房兄弟、源中納言具行、按察大納言公敏、四條隆資等三十餘人の公卿従ひ奉り、奈良を指してぞ落ちさせられた。

叡山に於ては護良親王、藤原師賢を天皇によるほい、主上と云ひ觸らして僧兵を勵まし、鎌倉勢の攻め寄するを待たせられて居た。

(八)

同じ八月二十四日夜も更けて風寒く、曉を覺ゆる頃、常陸守知時は手勢數百人を引きつれて皇居の内に亂れ入り、主上を彼方此方に求むれど御影だにも見えす、主上の御座所に至つて見れば先刻まで

在はしませし有様に種々なる御道具御硯など取り亂されて侍れど御姿は何處とも見えす、只女房達の周章て驚き泣き叫ぶ聲のみ喧しましかつた。斯く知時は主上の在はしませぬ事を知り、さては叡山に行幸きなりしかと遽かに叡山に攻め寄せん手配を爲し、又一方には公卿等の館に押し入て藤原宣房を始め原公明、藤原實世、平成輔等を捕へて六波羅へ送つた。

叡山に於ては尹大納言藤原師賢主上と稱し、金冠を載き袞龍の御衣を着け、駕輿丁五十餘人之をかき、御供の公卿を仕つらひ、雲母坂より登て西塔の釋迦堂に入れば大塔宮尊雲法親王を始め奉り僧

正圓觀、文觀、忠圓等出で迎ふ。親王は親ら山門の衆徒に向ひ
 「忝けなくも今日主上の臨幸は、鎌倉六波羅の逆賊原禁裏に亂れ入
 り主上を遷しまるらせんとするより、主上は出で、今此の叡山に入
 り、山門衆徒の力に依り、逆賊原を打ち滅ぼさんとす。ソレ山門の
 衆徒、主上の爲めに盡くされよ」

と仰せ諭された。衆徒の面々、

「あな有難の事どもや」

ど口々に罵り、勇氣は日頃に百倍した。それより山上に錦旗翻が
 へり、近隣の末山末寺に至る小法師原まで馳せ集ひ、山上に僧兵は

犇々と詰めかけ諸所を固め、殊に雲母坂、坂本の二方面は備へ嚴重
 であつた。

常陸守知時は主上叡山に在はしますと聞き、手勢六千餘を引きつ
 れて押し寄せ來り、四十八ヶ所に篝火を焚いて叡山をおつ取り圍ん
 だ。斯くて暗詹たる黒雲は全く天を蔽ひ、兵戦は空に輝き腥風殺氣
 はこの山にみちちた。

二十七日御味方の軍より射出す一本の箭に合戦は始まり、弓弦の
 響き太刀打物の鳴り叫ぶ聲天に響きて凄まじかつた。血は流れて四
 邊は朱に染み、緑の草は蹂躪せられて痛々しく顛えて居た。其の日

も暮れて互に休戦し各々陣に憩ひ、月は新戰場に生々しき死屍、血痕を淡く照らして凄壯を帯びた。兩軍の陣には盛んに篝火を焚いて一日の合戦に疲れし人、傷に悩む人々が火を取圍み、物具つけたるまゝ休んで居る。

明れば二十八日の朝まだき、霧深く黑白も分かぬに、坂本を固む御味方の陣營を少し離れて、松の根方に二人の大法師、小具足、鎖襦袢を着け、小手脛當に身を固め、兜頭巾を頭に戴き、大薙刀を突いて突立ちけるが、耳を澄ませば微かに聞ゆる人馬の聲は必定敵の攻め上るならむと、彼の大薙刀を小脇に搔い込み、眼に物見せて呉

れんづと待ち構へて居た。其處へ現はれ出でたるは六波羅勢の内、海東左近將監宗高自ら真先きに立ち、百騎許りを率ゐて出で合ひしが、此の二人の法師の有様を見てカラ／＼と笑ひ、
「あな物々しき法師の振舞かな、いで先陣の門出に吾れ、兩人を生捕りくれん」

と云つて進んで来た。法師も薙刀捨て、宗高とヒツ組み、遂ひに宗高の首を搔き落した。又一人の法師は此の間に彼の大薙刀を振て敵の陣中に躍り入り、忽ち二騎三騎を斬て捨てた。

此の勢ひに敵の足許亂れ尙も二人の法師は荒れ狂ふ折りしも又麓

の方より敵の一隊押し寄せ來り、味方も此の物音に馳せ來り兩軍入り亂れて戦ひ、此處に二十八日坂本の合戦は開かれ、夜は全く明け離れた。

此の日護良親王の御出装は卯の花絨の御鎧に鍬形打たる御冑を着けて大矢を負はせられ、又宗良親王は生絹の、御衣の下に萌黄の御腹巻をつけ給ひ、尙師賢は唐の香染めの薄物の狩衣に、褐に赤き腹巻を下に着て蒔繪の細太刀を佩き華やかに出装て親しく指揮をして居た。

合戦は終日打ちつ打たれつ戦つたが、遂に御味方の軍大勝し、敵

を散々に打ち惱まし遠く追ひ落した。斯くて敵も味方も疲れ、それより數日敵は只遠く圍みて對するのみであつた。然るに何時か味方の軍に主上は偽なる主上と知れ次第に味方の勢は散り敵に益々新手の加ふるのみであつた。遂ひに親王も最早や叡山を守り難なく思ひ給ひて、密かに宗良親王、師賢等と共に笠置の方を指して落ち行かれ、叡山も遂ひに陥入つた。

(九)

主上は一度奈良へ御潜幸遊ばされしが、尙ほ御心許なく思召されてか、元弘元年八月二十七日と云ふに、山城國笠置山なる笠置寺と

云ふ山寺へ再び御遷幸遊ばされた。

假の皇居とは云ひ乍ら、古びたる山寺の荒み果てたる本堂に、御座所の襖さへ色褪せて所々に破れ、夜の冷たき風さへ漏れ來たり、時々御夢を驚かす。御側に仕へる藤房、季房、隆資等 御供の公卿も御痛はしき有様に、潜かに涙に袂を濡らした。

未だ集り守る武士もなく、夜を守る衛士もなく、只山僧の寄り集ひて寂しく火を焚きて秋の一夜を守るのみ、主上は御心詫びしく其の日くを送らせられた。或る日、一日思ひ煩はせ給ひて御疲れの餘り、トロくどまどろませ給へば忽ち御夢に入らせられた。其の

御夢に………主上は只御一人御心寂しく、ブラくと迷ひ出で給へば、不思議や此處は都なる紫宸殿の御庭前であつた。打ち見れば一本の大なる常盤木の緑なる蔭は茂り、南にさし出でたる一枝は太く榮え繁つて居た。そして其の下に三公百官位に依て列座して居る。南面の御座所には一段高く疊を敷き、未だ其處に座せる者はなかつた。主上は御心に、

「誰を設けん座席なるよな」

と怪しく思召されて居た。此の時髻結たる二人の童子、忽焉として來り、主上の御前に跪き、御座所の方を指し涙乍らに、

「一天下の間、今暫くも御身を隠さるべき所なし、然れども彼れなる樹蔭に設けし南面の御座席こそ、主上の御爲めに設けられたる玉座にて候、暫く彼れに御座まし候へ」

と云ひて二人の童子は遙かなる天に上て行つた。主上は、

「アラ不思議なる事なれよ」

と思召された……此の時御夢は醒めた。主上は熟々不思議に思召し、御夢を文字にて御料簡あるに、木に南は「楠」なり、樹蔭に於て南面して座せよと二人の童子の云ふは、彼の日光、月光の「朕再び南面の徳を治めて、天下の士を朝せしめんする所」を示されたる

ものなるよと、御夢を判断遊ばされ、直に當笠置寺の住僧成就房律師を召され、

「此邊に楠と呼ぶ武士ぞあるや」

と問はせられた。律師は畏み謹みて、

「近き傍りにさる姓の者ありとも承り及ばず候。さはれ河内國金剛山の西、赤坂なる里に楠多門兵衛正成とて、矢弓取て名を得たる武士の候。彼れは畏くも敏達天皇四代の孫、井手左大臣橋諸兄公の後胤には候へども、年久しく民間に下り居れる者に候。而して彼れの母、其の上子無きを憂れひ 信貴の毘沙門天に百日の間詣で、御夢

想を感じて儲けたる子に候由。幼名を多聞丸とこそ聞えて候」と奏し上げた。主上はハタと御膝を打たせられて、

「サテ、昨夜の告、是れこそ其の者なり」

と打ち喜び給ひて、直ちに藤房卿を召し、之れより速かに其の者を召し出せと仰せ遊ばされた。

藤房卿は直ちに御愛けに及び、用意整へ赤坂村なる楠多門兵衛正成が館をば訪れらるゝ事となつた。

斯くて南風漸く起り、楠氏の一門競ひ起ち、諸國勤王の士馳せ集ひ、笠置の奥に風温かく、輝ける日光は此の古き山寺の上に明るく

照らさんとして来た。

(10)

金剛山の西の麓、赤坂村の秋の暮、木々に木の葉は散り行けど、夕の光は梢に残り輝いて居る、赤坂館の主楠多門兵衛正成は今しも庭に下り立ちて、暮れ行く空を眺めて居た。

此の時表の方より訪ないし客は、一人の僧を案内に、二人の雜式を従へて、今立關にさしかつた。此の時案内の僧は、

「御頼み申す」

と云ふ言葉に應へて取次に出でし郎黨とも思はしき男は、客の様子

を眺め怪しげに、

「何方よりお越しでおじやる」

此の時客は、

「身は都の方より参りしもの、御館の主楠多門兵衛正成殿に御面會な申さん、よきなにと取次ぎ候へ」

彼の郎黨は「暫し」と云ひて奥に入り、主正成に此の趣を告げた。之を聞いて正成は衣紋を繕ろい形を改めて出て來た。そして、

「身が當館の主、多聞兵衛正成でおじやる、先づお通り召され」
「御免候へ」

其の儘客と正成は奥へ這入た。先づ正成は、

「お訪ねの次第、何事でおじやる」

此の時客は言葉を改め、

「身は今上の御勅使萬里小路藤原藤房にて候」と云ひてズツと立上り正成の上座に座した。此の時正成は遙かに座を下つて頭を下げた。藤原卿は徐ろに、

此の度鎌倉の執權北條高時、惡逆無道にして政を省みず、上は畏くも天皇を蔑にし、下は萬民を塗炭に苦しむ。依て主上兵を起し逆賊高時を誅し、主上親ら政を行ひ給ひ、仁政を施し皇恩の有難

きに浴せしめんと思召さるれど未だ御運到らず、却て逆賊原の爲めに都を落ちさせ給ひ、今笠置山なる笠置寺に行幸なり給ふと雖も、天下未だ勤王の士薄くして御味方に馳せ参する者少く、主上は痛く震襟を惱まし給ふ。然るに主上たま〜夢に御身を見そなはせ給ひて深く御身が勤王の志を知し召され慕ひ給ふ。斯くて此の藤房をして御身を招かしむるものにて候」

と主上の御旨を傳へた。正成は黙して之を聞き、尙ほ暫しさし俯いて、暗然として涙を呑んで居たが、稍々ありて首を上げ、

「あゝ御痛はしき事に候かな、一天萬乗の君にましまし乍ら、逆賊

原の爲めに都を出でさせ給ひ、斯く寒山の古寺に御身を忍ばせ給ふ事。あゝ天は必ず無道を悪くませ給ふ。鎌倉の暴逆横道、逆臣北條高時、ヤハカ正成其の儘にさし置き申すべき。速かに馳せ参じ必ず叡慮を慰め候はん」

と言ひて、ハラ〜と涙を落し、又キツと東の方を白眼むで拳を握つた。正成の胸には如何なる感慨悲憤の情が湧き立ちしか。藤房も共に胸迫りてハラ〜と又涙を落した。暫し二人は黙して居たが此の時藤房は再び口を開いて、

「御身が厚き勤王の志、藤房歸りて之を奏上しなば、主上の御叡

感如何許りに御喜びの事に候らはん、必ず正成殿、御身勤王の事に力をいたし、再び主上をして都に迎へしめ給へ」

「正成如何でか違背いたし申すべき、之より直に馳せ参じ候はん」

「そを聞きていと頼もしき事に候かな、此の藤房は一先づ先きに歸りて、事の由主上に奏上して御身を待たなむ。必ず直ちに参られ給へ……さらばで御座る」

と云つて藤房は立ち上つた。正成は、

「さらば御免候へ」

二人は此處で別れた。

藤房は歸つて此の由を主上に奏上した。

跡に正成は家子郎黨を集め、今日勅使の來たりし次第を語り、自分の胸を語り、子弟を誠しめ、参内の評議を爲し、急いで其の手配りに取り掛つた。

赤坂の邊り一圓に美しき光はさし添え、秋の草木も皆勤王の旗風に靡びかんとした。

(一一)

笠置なる山の奥深く、笠置寺の邊り常ならぬ人馬の聲騒々しきは之れなん赤坂館の主、楠多門兵衛正成が、主上の召しに應じ手勢

五百騎許りを引具して馳せ参じたのであつた。正成は大音に、
 「河内國赤坂村の住人、楠多門兵衛正成、御勅召により只今御味
 方に馳せ参じて候」

と呼ははつた。此の由御側に奉仕する公卿より奏上すると、主上は
 龍顔斜めならず、御座所近く召せとの御詔に、正成は小具足着け
 し其の上に垂直を着し、立烏帽子を戴き、御座所近く進んで平伏し
 た。此の時御側に奉仕せし藤房卿より、

「彼れなる者こそ、御召しに依り、参内せる楠多門兵衛正成にて
 候」

と奏上した。主上は御感斜めならず、

「汝正成、朕が召しに應じて速に來る、朕深く之を嘉みす。朕一天
 萬乗の帝位にあると雖も、逆賊天下に横行して之を誅する能はず。

汝正成、朕が爲めに逆賊を打ち滅ぼし、朕をして再び天下をしらし
 めさしめよ」

と宣はせられた。正成は感激の涙押へ敢へずハラ／＼と落涙し、暫
 しは何の御應へも出でざりしが、稍々ありて首を微かに上げ、

「臣の微を以て忝けなくも龍顔を拜し、今又有難き御詔勅により逆
 賊追討の命を拜す。弓矢執る身の面目、一門の光榮、何事か之れに

如くもの候はんや。微臣正成、熟ら熟ら考ふるに東夷近日の大逆、之れ天の悪くみを受け天の譴を招く處、天誅を加ふるに何の子細か候はん。凡そ天下の事を平定せんとする者、只智を以てすべからず又只勇を以てすべからず、智勇以て爲すべしとこそ存じ候へ。而して今鎌倉の様子を見るに、只彼等は勇あつて智乏しく、されば只武を以て争はんには勝たん事難く候へども、智を以て滅ぼさんには必ずしも難き事に候はず。臣が胸中謀計を以て攻め滅ぼさんには、武勇一邊の鎌倉勢何程の事か候ふべき。さはれ勝敗は合戦の習ひに候へば、例へ官軍一度敗ると聞し召し給ふとも、未だ正成一人生き長ら

へ候と聞し召さば、聖運遂には必ず開られむ事と思召され、御叡慮安んじ候へ」
 と、最も頼母しく奏上した。主上は御喜びの涙堰きあへ給はず、「やよ正成、朕は汝を力と頼まむ、汝必ず身を全うして誠忠を盡し呉れよ」
 と宣はせられた。正成は斯くと承はり、又感激の情いやまして、せき来る涙止め敢えず、鎧の袖に涙を押し隠した。並み居る人々も共に感激して涙に袖の袂を絞ぼつた。暫らくにして正成は再び面を擧げ、

「臣は之れより御暇を賜はり、再び赤坂村に立ち歸り、赤坂に本城を築き、若し當笠置の陥らば主上を迎へん用意な仕り候はん。さらば之れにて御暇賜はらむ」と奏上し龍顔を拜し、御前を退き去らむとする時、藤房は、「やよ正成殿、暫し待たれよ。御身は今之より赤坂に立ち歸り、本城を築かむと仰せらるれど、そは如何なる故に候ぞ。若し御身赤坂に歸りなば、當笠置の山に主上を守護し奉る者も候はざるに、それとも當笠置は防戦に地の理悪しと思し召されてか」と問はせられた。正成は、

「之は藤房卿の御言葉には候へ共、今にも主上此處に在しますと聞き、錦旗の山上に翻るを見れば四邊勤王の士急ぎ馳せ参じ候はん。而して當山は自然要害堅固の所なればよく少數の御味方を以て、數萬の鎌倉勢をも防ぎ得候はん。然れども今正成此處に止まり、官軍又皆此處に集り候て、若し鎌倉の大軍押し寄せ來り、遠く當城をおつとり圍みて尙ほ彼等戦はざれば、當城如何に堅固なりと雖も、兵糧攻めとなりて自然滅亡に歸し候はん。されば此の憂ひ除かむ爲め、正成は赤坂に立ち歸り本城を築きて後詰めの手配仕らむ」と申し述べ、其の儘正成は赤坂に立ち歸つた。

笠置山に於ては、正成の言葉の如く、果して勤王の士足助重範、錦織判官代俊政、石川義純父子等相續いで各々五十騎百騎の手勢を引き具して、錦旗を望んで馳せ参じた。又之を望み見て附近の豪族、僧徒等も御味方の軍に馳せ加はり忽ち數百騎の者集まつた。其處ら邊りの百姓は之を眺めて打ち驚き、

「笠置の山には何事でおざる。此の頃見なれぬ武士數多集まり、旗押し立て、合戦でもいたすげな。して合戦は誰れと誰れでおざらうか」

「さればでおざる。何か都より、主上とやら御出でありて、鎌倉殿と合戦とな、ハアハ：世には随分馬鹿な者もおざるわ、今時鎌倉殿に敵對して勝て様道理がおざらぬわウハアハ……」

「うかとは高い聲で笑はれ申さぬ事でおざるアレ向ふへ武士が見へておざる」

二人は暫らく口を噤むだが、武士の行き過ぐる後ろ影を見て、

「滅多に悪口は申されぬ、ハアハ……」

「でも聞かれぬで幸ひでおざつた」

「して主上とは如何なるお方でおざらう」

「ホウ何でも禁裏様の事でおさるさうな」
 「ハテ禁裏様と鎌倉殿とは何れが上でおさるかなう」
 「知らぬ事。でも此處のお地頭は鎌倉殿の家來じやげな」
 「すりや、年貢米とつて威張るお地頭より偉らい鎌倉殿なら、主上とか申す禁裏様より鎌倉殿が偉らうおざらうぞ」
 「無知なる百姓はたわいも無い話に、未だ主上の有難き事も、又主上と幕府の執權との尊卑さへ知らないのである。そして彼等の眼には横暴なる地頭が恐らく尊く見えたのだ。尙ほ百姓等は寄り寄り這磨噂をして居た。」

「大分合戦も近づいたげな」
 「左様でおじやるか、すりや大變でおさるわ吾々もうかとは斯うして居られ申されぬて」
 「左様でおさる、合戦始まらば弓矢も飛ぶでおざらふ、人馬も暴れ狂ふでおざらふ、女や童共にはいかい危ぶない事でおさる」
 「すりや、それ處ではおざらぬ。家も暴らされやうづ、畠も暴らされやうづ、米や麥も取り上げられやうづ、時には家も火を掛けられて焼かれやうづ、てもいかい迷惑な事でおざらぬか」
 「あれ見やれ、笠置の山を見やれ、遠く吹き流しの旗が立てられて

おざる。昨日よりも旗數が増えてはおざらぬか、御味方も又増えたでおざらう。すりやことによると今に鎌倉殿が押し寄せても、敵はぬ事ではおざるまいか、したならば吾々も今の内より御味方に付き申さうか」

「でも今にも鎌倉殿の大軍が押し寄せて來ましたなら」
「ハテ如何しやうづ」

此の頃又叡山陥りて、大塔宮護良親王、妙法院宮宗良親王を始め奉り、尹大納言藤原師賢以下數多の公卿等と共に叡山の僧徒も落ち來り、尙ほ奈良東南院の聖尋僧正も數多の僧徒を引きつれて落ち

て來た、

斯くて笠置山には其の勢己に千餘騎、要害嶮阻なる山に、巖を切て堀を作り、石を疊みて堀を築き、柵を設け、又麓を流るゝ木津川には橋をひき逆茂木をうるて準備を整へ、山上には高く錦の御旗を翻がへし、大旗小旗と百餘流を風に吹き流し、堂々と陣を構へ、今にも鎌倉勢押し寄せ來らば、打ち挫ぎ、打ち滅ぼし呉れんと待て居る。又一方楠木正成は赤坂村に立ち歸り、一族郎黨を勵まし、城を築き櫓を建て、兵糧を貯へて準備オサく怠らなかつた。

斯くて今、亂雲低く東西に飛び、醒風吹き來たつて殺氣は天に満ち

笠置山の邊り、赤坂村の附近、今こそ草木も皆勤王の旛風に靡き従ふて居る。

(一三)

鎌倉にては執權北條高時、自ら行ひを改めず政を省みる事なく、佞臣の徒之れに阿諛し、夜を日に次いで酒宴の席に美人を侍らし、秋の長夜に灯かゝげて管弦の響は幕府の外に洩れ聞えた。斯て元弘元年八月末の頃、六波羅よりの注進は、主上の御謀判、叡山の合戦を知らせて来た。高時は大に驚き且つ怒つて、

「ウーム、さては主上の御謀判とな、彼の俊基、資朝等の青公卿原

が主上を勧め、叡山、南都の坊主めが御味方と決まらば、最早や猶豫もなりがたし。物々しや青公卿原が謀らひて此の高時を攻め滅ばさんとは、いで吾れ大軍を發して都に押し寄せ、叡山、南都を焼き拂ひ、法師の兵を踏み破り、青公卿原を捕へて一々首刎ねて呉れん斯くなる上は主上と雖も最早や容赦なり難し。御位を下ろして遷しまゐらせむ」

と齒齧みを爲し、俄かに管領長崎高資以下、大佛貞直、金澤貞將、足利高氏等の諸將を召し、事の由を打ち語らひ、速かに出陣の用意をなさしめた。

斯くて九月五日、管領長崎高資軍監となり、大佛貞直、金澤貞將、足利高氏將となり、二十萬八千の大軍を率ひて京都に向つた。其の有様は先陣既に鎌倉を發して三日、尙ほ軍の終りは鎌倉にありて數十里の間皆鎌倉の勢、草も木も皆押し靡びかせ、もみにもんで京都に馳向つた。

此の時叡山は己に陥り、常陸守知時は主上笠置にあるを聞き六波羅勢七萬五千を三手に分け、笠置に馳せ向つた。斯くて六波羅勢は糟谷三郎實顯、陶田次郎右衛門貞國各一方の大將となり、知時自ら中軍の將となり、九月六日笠置に着し、笠置山をおつ取り圍んで陣を張つ

た。笠置山に於ては官軍の兵、豫て覺悟の事なれば、足助重範、錦織判官代俊政、石川義純父子等の諸將各々要害を固め、味方の軍を勵まして兩軍茲に相對した。同じ日の午後、城内味方の軍より敵の陣中眼蒐けて、矢を放ち漸く合戦は開かれた。兩軍より亂れ飛ぶ矢は風に亂るゝ葦よりも尙ほ繁く見へ、太鼓は天に響き地を動かし、人馬の矢叫び實に凄まじかつた。夜に入りて合戦靜まれど、篝火焰々として天に漲り、夜も晝の如く明るかつた。又明けて合戦を始め、敵の陣中より進み來る者

或は矢に斃れ、或は石に押し潰ぶされ、要塞堅固なる城中容易に近寄る事は出来なかつた。

斯くて數日合戦し、敵は只遠くおつ取り圍み矢を放つて攻むるのみ何時城の陥る可きとも思はれなかつた。

漸く二十七日に至り、長崎高資、大佛貞直、金澤貞將、足利高氏等の率ゆる鎌倉の大軍押し寄せ來たつて敵の陣中遽かに色めきわたつた。斯くて其の日の夕、秋の雲低く垂れて雨は肅々として降り出し敵も味方も合戦を止めて兩軍静まり返つて居た。此の時鎌倉勢の中に、備中の國の住人陶山義高、小見山氏真なる者が居た。して義高

は氏真に向ひ聲を潜めて、

「小見山殿、チト内談がおざる」

「何事でおじやる陶山殿」

「さればでおじやる、味方の斯く大軍を以て僅か一萬に足らざる敵の城を攻め取る事能はざるは残念でおじやらぬか」

「左様でおじやる」實に味方の面目鎌倉殿に申し譯もおじやらぬ」

「さればさ小見山殿、吾儕もさ思ひまいて此處に一つ思ふ仔細のおざる」

「そは如何なる事でおじやるか聞かして呉れやらぬか」

「小見山殿聞いて給はれ。今宵斯く雨降りて闇深く、如何に敵の軍勢も心許して鎧を解き必ず油断がおじやらう。ハテさて其處でおじやる。抜け駆け功名は合戦の習ひ、今宵敵の油断をはかり、吾儕密かに敵の城中に忍び入り、火をかけて討たば勝敗は今宵の中に決するでおじやらう」

小見山はハタと膝を打ち、尙ほ二人が何事かを密かに囁き合た。

(一四)

夜は更けて雨は尙ほ瀟々と降りしきり、闇は益々深く黑白も分かぬ其の中を、敵か味方が五十騎許り、笠置山の北方よりヒソ／＼と這

ひ上る一隊があつた。彼等は柵を越え塀を超え、事なく城中に忍び入つた。其の時城中寂として聲はなかつた。彼等は

「幸ひ敵は未だ氣がつかぬ様でおじやる」

「さやうでおじやる、よき時機でおざる」

「さ、一刻も早く」

斯く囁き合つて、豫ねて用意の火を取り出で、彼方の人なき坊に火を掛けた。急ち火は燃え移り、黒烟は渦を巻いて立ち上つた。此の時彼等はドツと関の聲を作つて城中へ亂れ入つた。

此のもの音に城中の者眼を醒し、見れば彼方の坊より火は焰々と燃

え上つて居た。此の時官軍の將足助重範、錦織判官代俊政、石川義純父子なんどの面々此の體を見て、

「アナ無念やな、敵か味方か知れざれど闇夜に乗じて火を放つ不敵のシレ者……今は之れまでなり」

と無念の齒嚙みをなし、太刀薙刀おつ執つて馳せ出で、大音聲に

「やア〜何奴なれば夜中推參、いで見參」

と呼ばはつて突立ち上つた。此の時彼の五十騎の敵の面々は早や己に茲に亂れ入り、

「吾れ等は鎌倉勢にさる者ありと知られたる備中の國の住人、陶山

義高、小見山氏眞が身内の者どもなり」

と呼ばはつて、忽ち入り亂れて切り結んだ。

此の時火は益々燃え上つた。

麓に於て此の様を望み見たる鎌倉勢、

「さては敵の陣中密かに味方に應ずる者ありて火を放ちたるか、又味方の陣中より抜け駆けせる者のありたるにてか、功名手柄を爲すは今なるよ、人に後れず吾れ功名を表はして鎌倉殿の恩賞に預からん」

と、ドツと鬨の聲上げつゝ揉みに揉んで山上眼蒐けて馳せ上つた。

斯くて南軍入り亂れ、太刀打ち叫ぶ聲は闇を閃んざき木間に響いて
凄さまじかつた。暫しが間兩軍共に勝敗決せざりしが、官軍次第に
討たれ、鎌倉勢は益々新子の兵を加へ、早や味方の大將錦織判官
代俊政、石川義純父子も討死した。

主上は此の時、最早や之れまでと思召され、萬里小路藤原藤房、弟
季房、尹大納言藤原師賢、四條隆資等の公卿と共に闇に紛れて落ち
行かせられた。又尊良親王、大塔宮護良親王、妙法院宮宗良親王を
始め奉り、奈良東南院の聖尋僧正、按察大納言公敏、源中納言具行
外三十餘名の公卿等も思ひくりに笠置を出で河内國金剛山の麓、楠

木多門兵衛正成が赤坂城さして落ち行かれた。

此方笠置山に於ては尙ほ足助重範一人止どまつて奮戦したが、遂に
力盡きて鎌倉勢の爲めに捕はれ、城は全く賊軍の手に陥た。此の時
天漸く明けはなれた。又さしも降りしきつた雨霽れて、日光は哀し
く慘劇の跡を照らし、深傷に惱み弓杖ついて突立ち上る者のヨロヨ
ロと打ちよろめき、及に伏して斃るゝ者の聲微かに呻めき、死屍累
々とし鮮血淋漓として迸しり、折れちぎれたる、弓、矢、太刀、薙刀
は散亂し、風腥さく吹き來つた。

只勝ち誇たる鎌倉勢は関の聲あげて落ち行く者の後を追ひつ、勢ひ

に乗じ大擧して赤坂城に押し寄せんとして居た。

(一五)

主上は數多の公卿と共に夜に紛れて笠置の城を出させ給ひ、赤坂城
 として落ち行き給ひたれど、早や夜も明け方に笠置を遠く離れ給ひ
 し頃は、御供なせる公卿の人々も深き闇路に踏み迷ひて只萬里小路
 藤原藤房、同弟季房のみ御供仕まつた。主上は龍顔いと寂しく
 曇らせ給ひ、藤房兄弟をかなしげに省りみ給ひて宣へけるは、
 「朕が聖運未だ開けざるか、はた如何なる宿世の縁にてか、朕十善
 の戒行を保ちて一天萬乗の帝位にあるも、逆賊原の爲めに都を出で

今又彼れ等が爲めに笠置の城を落ち行きては朕が行末如何なるべき
 あゝさるにても尊良、護良、宗良等の和子達は如何なりしか、事なう
 城を落ち行かれてか、賊軍の手に捕はれてか、いと心許なき事
 こそ」

と仰せ給ひてハラ／＼と御涙を落とされた。藤房兄弟も共に涙を流
 しあひ、

「あゝ實に御悼はしき事に候かな。主上は今一天萬乗の帝位に在は
 しまし、一天の下何れか王土ならざる所なく、人皆王臣に非ざるな
 きに、如何なる世の末と申せ、斯る御有様こそ實に御悼はしくも歎

かはしき極みにこそ候へ。然れども天道如何でか無道を惡み給はざる可き、必ず逆賊滅びて聖運再び開かる可き時の候べし。それまでは臣等如何なる邊へも御供仕り候べければ、御叡慮慰め安んじ候へ。

と奏上して兩人は又ハラ／＼と涙を落した。藤房兄弟の流した涙は實に高嶺の小笹に宿りたる露よりも尚ほ清く純なるものであつたのだ。それより兄弟は尚も主上を慰め奉り、

「何時まで、斯くして此處に在はすべきに候はねば、いで之れより河内國に多門兵衛正成が赤坂城に御供仕らむ」

と兩人左右より、主上を援け奉り、山路を辿りて出で立つた。

敵に見露はせじと、晝は野に伏して御身を隠し給ひ、夜に入りて歩ませ給ふと雖も、慣れ給はぬ山路の御旅に、トボ／＼と路も埒り給はず、野分の末にサラ／＼と鳴る薄の音にも御心怯びえ給ひて、早や三日三夜、小川の流れを掬ひ給ひて渴ける御口を濕ほし給ふ外、飲むべきものもなければ、まして飢えを凌がせ給ふ御糧もなく、いと御身心疲勞れ給ひて、ヨロ／＼と御足許もいとあやふく、藤房兄弟も己に疲勞れて、今は詮方なく、折ふし秋の小雨さへシト／＼と降り出でたれば、暫しが間木蔭に身を寄せて松の根方に御腰を下

させ給へば、藤房兄弟は各々己が袖を片しきて主上を慰はせ奉つた。此の時何處からともなく風は颯と吹き来り、ラハハと露落ちて御衣の袖を湿ほした。主上は熱々御袖にかゝれる露を眺め給ひて、

さして行く笠置の山を出でしより

天が下には隠れ家もなし

どいと細き御聲に、いと哀れなる御調子に詠ませられた。之を承はりて藤房兄弟は、御心の程を推し奉りて、暫しが程は涙に咽びて何の御應へも出なかつた。此の時藤房は、やう／＼に涙を拂ひ、

如何にせむ頼む蔭とて立ち寄れば

尙ほ袖ぬらす松の下露

と御返しを奉り、御心を慰め奉つた。

斯くて尙ほシト／＼と降る雨の中を、再び立ち出で給ひて、漸くに高間山なる所に出でさせ給ふた。

此の時山城國の住人深栖五郎入道なる者數名を引きつれて此の所へさしかつた。そして此の御有様を打ち眺め、

「あな怪しき人々やな、必定笠置の山の落人ならむ、われ召し捕つて鎌倉殿の恩賞に預からむ、ソレ者共ツ」

と下知し、彼等は既に玉體に近づき侵し奉らんとした。此の時藤房はキツト白眼み、聲を揚げ、

「汝等控へよ。茲に在する君を何と思ふ、忝けなくも人皇九十六代後醍醐帝にて在しますぞ、汝等無位無冠の下郎、近寄て無禮いたすな」

と叱した。之を聞いて深栖入道は驚き、馬より飛び下り平伏した。

此の時大佛貞直五十騎を率ゐて馳せ至り、主上の御供仕つて平等院に迎へ奉つた。それより主上はあやしげなる網代輿に召され、多くの武士に警衛せられて都より六波羅へ入らせられた。

(一六)

金剛山の西の魔、赤坂の邊り行き來の雲の怪しく往き通ひて風は俄かに吹き荒まんとして居た。附近の百姓はより／＼寄り集ひて、

「赤坂の御館には此の頃俄かに塀を建て、堀を廻はし櫓をかき立てまいておざるが又合戦でもおざるかの」

「さればさ、先つ頃都より勅使とやら参りまいて、今度禁裏様と鎌倉殿と御合戦に、禁裏様はもはや都を出で、笠置の山にお籠りなされ、鎌倉殿の大軍が其處へ押し寄せて來るとやら來たとやら、それで御館様も禁裏様の御味方をして旂擧げして合戦をなさるとの事で

おざる」

此の時一人の旅鳥は此處へ來たりて、

「若し御兩所、私は此の頃笠置の方より参りまいたが、仲々それ處の騒ぎでおざらぬわ、鎌倉より長崎高資とか申す大將が總大將となつて、三十萬とかの大軍をつれて押し寄せ、今合戦の最中でおざるわ」

「何！何と申さるゝ、鎌倉殿の大軍が笠置へ押し寄せて合戦最中でおざると、そして合戦の様子は如何でおざるか」

「何せよ鎌倉殿の軍勢は見渡す限りの大軍でおざる、それで尙ほ後

からく詰めかけておざる。城の中では只軍兵は討たれて減る許り、おつつけ城も陥て此處へも其の大軍が押寄せて來る事でおざるわ」と旅鳥は空嘯ぶいて、何處ともなく立去つた。跡に百姓は驚き騒ぎ「ソリヤ大變でおざる」

「什した事でおざらふぞ」

「御館の楠木殿は近國に名を得たる弓矢取りで、随分小人數のお味方で別當顯幸殿の大軍を度々打ち破た事もおざるが、今度其の鎌倉殿の大軍が押し寄せて來たならば、ても危い事でおざるわ」

「してお館では未だ此の事を知らずに居る事ではおざるまいか」

「左様でおざる、若し知らぬ事であつたなら早く注進して知らせるでおざらう。そしたなら楠木殿は偉らい軍師じやげな、又よい考へもおざらう」

「それがよい事でおざる」

彼の百姓等は赤坂城に行て斯くと門衛に告げた。之を聞いた門衛の雑兵は驚いて此の由を正成に申し上げた。此の時正成は己に彼れが腹心の臣恩池左近を間者として様子を探らしめ日々の注進に、何事も知つて居たのである。されば少しも驚く氣配もなく、

「總ては身が胸中にあれば必ず驚き騒ぐな、又ゆめ油断すな」

と云ふて彼等を勵ました。

此の時彼の恩池左近歸り來り、具さに敵の様子を語る様、

「笠置山に於ては、六波羅より常陸守知時、七萬五千の軍勢を率ゐて來り、合戦始まりて兩軍激しく戦ひ候ひしが城容易に陥らず、其の内に鎌倉より總大將長崎高資十二萬八千の大軍を率ゐて來り、其餘の大將には大佛貞直、金澤貞將、足利高氏各一方の軍を指揮して候。斯く八月二十四日雨の夜に乗じて敵の軍中より密かに城内に忍び入り火をかけて討ち候へば、味方の大將足助重範、錦織判官代俊政、石川義純殿親子の面々防ぎ戦ひ候へ共、不意を討たれたる

事に候へば殘念乍ら錦織殿、石川殿親子には戰死なされ足助殿には捕はれて城は遂に陥りて候。而して主上に於かせられては闇に紛れて落ちさせられ、又高良、護良、宗良親王を始め奉り其他公卿の面々も落ち候へば程なく此處へ參らる可く候。斯くて敵の軍勢は勝に乗じておつつけ此の城に押し寄せ來る可く候へば、はや殿にも合戦の御用意あつて然る可く候。

と申し述べた。正成は之を聞き打ち首頭き、弟正季以下の諸將を集め何事かを云ひ含め、夫れ々其の手配をなさしめた。

此の時尊良親王以下公卿其他の面々次第々々に落ち合つた。

(一七)

鎌倉勢は二十七日笠置を陥れ、勝に乗じドツと関の聲を作り、落ち行く者の後を追ひ、赤坂城に押し寄せんとし、三十萬の兵を三手に分ち、一手の大將大佛貞直は數萬の大軍を率ゐて北八幡より飯盛山の西麓河内讚良の路を出で、金澤貞將は西山崎より攝津國天王寺路を進み、足利高氏は伊賀路をとつて押し寄せて來た。斯くて赤坂城をおつ取り圍んたる鎌倉勢は見渡す限り野も山も、犇々として詰めかけ押しかけ旗差物に草木も押し靡かせて見えた。

赤坂城の方を見れば東南に小高き山を背負ひ西北は坦々たる平野に

展げ、俄かに築き上げたる城は塀も僅かに一重塗の壁に作り、淺き堀を廻らし、二丁四方が間に櫓三十程をかき立て、城兵僅かに五百餘人、いともいふせき有様であつた。鎌倉勢は遙かに此の有様を望み見て、

「あな、哀れなる敵の有様かな」

「斯る小城、吾等が片手に載せて投ぐる事を得む」

「責めてもの事に楠木一日も耐えて見よ。分捕功名をして鎌倉殿の恩賞に預からう」

「いで一揉みに押し潰ぶして呉れむ」

と口々に罵しり喚めき、城壁間際まで押し寄せて來つた。

此の時正成は弟正季、和田正遠をして三百の手勢を率きつれて、城の側なる山中に伏兵を置かしめ、時刻を計り城中より散々に射かけさせた。之を遙かなる山上より眺め居たる正季、正遠の二人は東西の山の木蔭から、菊水の旗二流、颯と松風に吹き靡かせて押し寄せた。鎌倉勢は之れを見て、こは敵か味方かと暫し躊躇つて居る間に三百餘の楠勢は咄と関を作つて、雲霞の如く棚引き亘つた敵の大軍の中へ、魚鱗がゝりの陣形にて突き入り、東西に馳け破り、四方に切り廻はつた。

鎌倉勢は之れに氣を吞まれ、呆ツとして陣をも作りかね、馬物具を打ち捨て、周章て狼狽めいて退いたが、混雑に自ら傷つき斃れ、死傷千餘人に及んだ。

斯くて鎌倉勢は矢合せの合戦に打ち惱まされ意氣頗る沮喪したが、大勢を頼める彼等は、

「之れしきの城何程の事かある」

と再び陣形を作り十重二十重に圍んで押し寄せて來た。然し此度は再び伏兵のあるを恐れて大佛貞直は數萬の兵をして、東西の山を守らしめた。寄手の勢は揉みに揉んで城壁近く進み寄り、蟻の這ひ上

るが如く塀に攀じ上つて行た。此の時城中は寂として静まりかへつて居た。正成は彼等が漸く半ば頃まで攀じ上つたる時を計てつ、豫ねて謀らひ造り置きたる二重なる外塀を一時にドツと切て落した。彼等は塀と共に押し倒されて混雑せる中を眼蒐け、城の上より大石小石、又大木等を投げかけ投げかけさせたので、見る間に敵は押し倒され押し潰され、數千の死傷者を出した。

鎌倉勢は斯くて二度まで手痛く打ち惱まされたれば、今は遠くおつ取り巻き陣を張りて相對するのみであつた。

之を城中より望み見たる正成は、

「卑怯なる敵の振舞かな、さては遠く取り圍み兵糧攻めになし、戦はずして城を落さん敵の謀と見えたるよ、いでさらば今一度彼等を誘ひ出し苦しめ呉れむ」と云いて、諸將を集め何事か打ち語らう所あつた。聽て城中よりは一隊の軍兵はさつと城門を押し開いて打て出でた。之を眺めたる鎌倉勢、

「さては城兵糧食乏しく苦し紛れに打つて出でたるよ、敵を打ち取り、城を落さんは此の時なるよ」と

と、敵は激しく攻め寄せて來た。味方は豫ねて謀れる事なれば次第

に退き、城壁近く一隊の兵を残して城に逃げ入り城門固く鎖した。敵は謀とは知らず、勝に乗じて城壁近く攻め寄せた。見れば一隊の兵と思ひしは皆人形であつたので、人々呆れ、

「さては又楠木に欺かれたるよ」と思ひ、直ちに引き返さんとする間もあらせず、城の上より、さし詰め引き詰め散々に射かけられたれば、鎌倉勢は又々多くの痛手を負ひて引き退いた。

(一八)

鎌倉勢は數度の合戦に打ち惱まされて、今は城に近づき押し寄せ攻

めんとする者なく、只此處其處に陣を張て遠攻めにして居たが、斯くては城容易に陥らん様もなければ、其後全く戦ひを止め、遙に退き遠く城をおつ取り巻き各々陣に櫓をかき、逆茂木を引て、愈々食糧攻めにせんとした。

之を眺めた城中の兵共は只咥れ手を下さむ様もなく、徒らに心疲れる様な心地して居つた。そして城は俄かに構えたる事なれば、兵糧なんどの用意も充分してなかつた。されば合戦始まつて城を圍まれ、僅か二十日餘りで兵糧も残り少なくなり、尙四五日支える程の食糧しかなかつた。そして此の頃城中に於ける雑兵は、

「之は如何相成る事でおじやらう。敵は遠くおつ取り巻いて、櫓をかき逆茂木を引て陣を構へておじやる」

「さればでおじやる。愈々敵は兵糧攻めと謀を定めた様でおざる」

「早や味方の城中に貯へた糧食は、今は四五日の籠城で盡き申す事でおじやらう」

「左様でおざる。此の儘にては吾れは只戦はずして飢え死を待つ事でおざる。殿は如何なるお考へを持つておじやらう」

「吾が殿は如何に勇があるとも、此の大敵の陣を破つて脱れ出る事は難い事でおざらう」

「ても殿には又如何なる謀を以て、脱け出でられぬとも知れ申さぬ」

「でも其は難い事でがなおじやらう」

と頼りなげに私語やく者もあれば、又彼等の中には、

「此の儘戦はずして死を待つは、實に口惜しうおじやる。到底も脱れぬ所であれば一層花々しく合戦して死に度うおじやる」

「左様でおじやる。此の儘飢え死するは實にはいなき死でおざる。

吾れらも潔よく合戦して討死し度うおじやる」

等と寄りく打ち語らつて、いと頼りなく見えた。此の時正成は諸

將を集め評議した。そして彼は、

「此の度數ケ度の合戦に打勝て、敵勢を苦しめ惱ます事數知れず。

されど敵の大勢は敢て物の數どもせず、今斯く遠くおつ取りまいて兵糧攻めの謀を廻らしては正成が力も之れ迄に候ぞ。而して正成天

下に先ち勤王の軍を起し、草創の功を建てんとす、素より命を惜む所には候はず。されど事に臨んでは恐れ、謀を廻らして好く成すは

却て勇士のなす所にて候ぞ。されば此の正成は暫らく城を落ち、自害したる體を敵に知らしめて身を潜め候はん。而して東國勢正成の

死すと聞かば悦びて兵を引き上げ鎌倉に下向せむ。此の時正成打て

出で、東國勢寄せ來らば又身を退きて潜み、斯くて敵の下らば打ち出で上らば潜み、而して數ヶ度東國勢を打ち惱まさば敵勢などか退屈せざらむ。是れ身を全うして敵を亡す計略にて候。面々の諸將は如何計らひ給ふぞ」

と述べて諸將に計つた。諸將皆等しく、

「吾等も然るべくと存じ候」

と此の説に同じた。正成は尙ほ何事かを打ち語らふ所あつて數日を過ぎた。會々雨は瀟篠として降り出し、風は俄に砂を卷いて吹き、夜の色は窈溟として、陣營は皆帷幕を垂れて居た。此の時正成は城

中に大なる穴を二丈許り掘つて、穴の中に死屍二三十を入れて上に薪炭を積んだ。そして城中に只一人を残し留めて彼れに向ひ、
「吾等落延んこと四五丁になりならむと思ふ頃城に火を懸けよ」と云ひ置て、皆物の具を脱ぎ捨て、三人四人と別れく々に、寄手の勢に紛れて敵の陣中を通り、悠々として落ちて行つた。

(一九)

笠置、赤坂の城陥りてより官軍の勢は、一時全く振はなくなつた。赤坂城の陥る頃、主上は捕へさせられて六波羅なる役所の南方に、粗末なる板屋を造り此所に入れ奉た。又笠置落城の折には宗良親王

も捕へさせられて長井高弘なる武士に預けられた。尙ほ萬里小路宣房、藤房、季房、源中納言具行、四條隆資、千種忠顯等十人の公卿も捕へられて各々官を罷められた。

六波羅なる主上の假御所には、御側に奉仕する公卿もなく、荒々しき武士の多く警護するのみで、いと御心細く思召された。或る夜雨降り出で、シクシクと雨戸を叩き、板屋の軒に降りかゝる有様を御覽遊ばされて、いと御心寂しく思召されて、

まだ馴れぬ板屋の軒の村時雨
音をさくにもぬる、袖かな

と御詠み遊ばされた。そして元弘二年三月鎌倉幕府にては主上を始め尊良、宗良兩親王を遷し奉り、笠置寺の別當聖尋僧正、尹大納言藤原師賢、萬里小路藤房、弟季房を流し、源中納言具行、平成輔藤原資朝、同俊基、足助重範等を何れも斬罪にした。そして主上を隠岐國へ遷しまゐらせんとして、同じ三月七日、怪しげなる輿に乗せ奉り、多くの警護の武士を附き添へ、六波羅を發して隠岐に向はせられた。

此の頃備前國住人、備後三郎兒島高德は勤王の志厚く。主上笠置に在します時、密かに兵を集めて御味方に參せんとしたが、間もな

く笠置、赤坂兩城も陥り、主上は六波羅に捕へさせられぬと聞き兵をやめた、そして今度主上隠岐に遷幸せられんと聞き再び兵を集めて主上の御車を途中にて奪ひ奉らんとした。斯くて高德は備前、播磨の國境、船坂山に手勢三百を引きつれて屯ろし、御車の來るを今や遅しと待ち受けて居た。此の時高德は衆を誡しめて、

「此の度吾れ主上の御車を奪ひ奉り、勤王の軍を起さんとする。而して今此所に御車を待つて奪はんには、汝等必ず主上の玉體に過ちなき様注意せよ。それには敵に覺られぬ様此處其處に身を潜め、不意に起つて敵を追ひ拂ひ、御車を奪ひ奉れ」

と云ひ含め、船坂山の上路嶮しく、木蔭も小暗き所一丁許りが間に四人五人と身を潜めて御車を待つた。此の時麓の方より急いで上つて來た一人の旅人は、高德が敵の様子を探らせんとして出した間者であつた。間者は高德の傍らに來り、

「殿、残念でおじやる。御車は播磨今宿なる所より、路を換へて山陰道に向ひまいておじやる」

之を聞いて高德は驚き且つ怒り、

「さては敵の奴原、吾が此所に在つて御車を奪ひ奉らん事を知り、山陰道に路を換へたるよな。よしさらば之れより美作國杉坂山に馳

せ向ひ、御車を奪ひ奉らむ」

と俄かに同勢を引きつれ、揉みに揉んで杉坂山に馳せ向つた。然るに同勢が其處に到着した時は既に御車は此處を過ぎて、空しく後を追ふのみであつた。斯くと知つた高德は、

「あゝ吾が事も己に之れ迄なり」

と、太く歎息し、失望と無念の涙に暫しかい暮れて居たが。應て衆を解散し、高德は只一人御車の後を慕つた。そして院の庄と云ふ所にて漸やく御車に追ひ着いた。其の時會々雨が降り出して御車は其處に止まり、院の庄の浄土寺に行在所を定めた。高德は其の夜密か

に、小櫻絨の鎧の上に箆を着て行在所の庭に忍び入り櫻を削つて、

天莫空勾賤。時非無二范蠡。

と書いた。主上は之を御覽遊ばされ、御心密かに勤王の士あるを思召されたが、護衛の武士の中には一人も其意を知る者は無かつた。それより主上は、再び多くの武士に護衛せられて隠岐に遷幸遊ばされ、寂しき日を御送り遊ばされる事になつた。

(110)

笠置山陥りて、大塔宮護良親王は、楠木が赤坂城に落ち行き入らせ給はんとせしが、途に迷ひて遅れ給はば早や此の時、鎌倉勢は城を轟

々とおつ取り巻き、城に入るも許さず、城より出づるも許さねば、親王は詮方なく引き返し、南都般若寺に入らせ給ひ、御身を忍ばせ遙かに赤坂城の様子を聞き、主上の御身の上を探らせられた。親王は南都に在はしまして、晝は般若寺の奥深く身を忍ばせ給ひ、夕静かに人もなき折りは、忍びやかに庭に下り立たせ給ひ、僅かに行く雲を眺めては、來し方行く末を偲び給ひ、夕の風にそよぐ庭木の葉を見ては世の果敢なさを感給ひ、其の外は常に籠り居て、僧侶を召して寂しき御物語りに日を送らせられて居た。斯て南都に身を忍び給ふ事十數日、頼りに思召されし楠木が赤坂城

は陥ち、主上も隱岐に、遷幸遊ばされぬと聞こし召されては、一しほ御心哀れ寂しく思し召された。されども心雄々しき御方に在ませば、御心取り直しては又密かに鎌倉滅亡の謀を計らせられた。そして人をして諸國に令旨を傳へしめ、尙ほ正成が後の消息など探らしめられて居た。或る夕、親王は毎の如く庭に下り立たせ、木々の間を静かに歩ませ給ひ、空眺めては物打ち案じさせて居給ひしが、此の時遠く微かに人馬の聲、此方にさし來る音と聞かせられ、「ハテ彼の物音は何事の起りつるぞ」

と思召され、尙も御耳を澄まし給へば、音は次第に近づけば、愈々怪しき事に思召された。此の時一人の寺僧はバタ／＼と御傍近く馳せ來つて、

「官様には御身の上に危険迫りて候ぞ。只今一乘院の侯人按察法眼好専、鎌倉に心を寄せ親王を捕へ奉りて鎌倉の恩賞に預らんと、五百人の同勢を引きつれて、此處へ押し寄せ來りて候ふ。アレ彼なる物音こそ、好専が同勢の押寄するにて候ふ。宮様には早く／＼御覺悟候て、未だ此處へ寄せ來ぬ間、速かに此處を落ちさせ給へ」と云へば。親王は驚かせ給ひ、

「何、按察法眼好専が、同勢を引きつれて此へ押し寄せ來るとな……さてこそ」と仰せられ、今はキツと覺悟し給ひ、怒れる御心に雄々しくも、一方を斬り開いて落ちさせ給はんとした。此の時又もや一人の寺僧は馳せ來つて、

「親王には落ちさせ給はん事既に遅し。敵は大勢にて寺をおつ取り巻き、早や其の手配りいたして候ぞ。暫らく彼方にて御身を隠させ給へ」と云ひ。親王の御手をとり、奥院の本堂に入れば其處に大なる唐櫃

二つ並べられてあつた。此の時彼の僧は、手早く一方の唐櫃の蓋を開き、中より經文を取り出し、中を指さし、

「暫らく其處に忍ばせ給へ」

と云ふて、親王を入れ奉り、上より取り出したる經文半分許りを擔がせ給ひ、僧は其の前に座して讀經の體を裝うて居た。此の時早くも按察法眼好專は手勢二十騎許りを以て門内に亂れ入り、奥の院の本堂に來り、讀經の僧に向ひ、

「吾れらは鎌倉殿の命に依り大塔宮を探ね奉る者に候。而して親王は正しく此の寺に隠れさせ給ふ事を知り、斯く同勢をひきつれ

て馳せ向ひる者なるが、宮は何處にわたらせ給ふぞ、早やく出し候へ」

と云へば、彼の僧は少しも騒げる氣色なく、いとも靜かに、

「何と申さるゝ、大塔宮は此の寺に隠れさせ給ふと、吾らはさる御方を知り申さず、又さ許り尊き御方の姿も見侍らず。若し僧が言葉を不審に思召さば、何處なりとも此の寺の内勝手に探し候へ」

と見向きもせず、再び聲をあげて讀經を始めた。好專は、

「さらば吾ら探し出さん」

と云ふて、二十人の同勢を分け、天井の裏より床下、縁の下に至る

まで、彼方此方と残る隅なく探したれど、親王在しまさねば、好專は再び本堂に來りて僧に向ひ、

「親王此處に在はする事を知りて、此處へ吾ら向ひつるに、何處を求むるも在さざるは不審なり、尙ほそれなる唐櫃こそ怪し」と云へば僧は、

「之れなる二つの唐櫃は、大般若經を入れたるものなり、而して一方は今僧が讀經を上げんとして開け中より經文を取り出したるものなれば不審も候はざらむ、されど一方は未だ閉ぢたる儘まなれば、御身の怪しと思はさるゝも當然の事に候へば、早や〜開き、中檢

めて御不審晴らし候へ」
と云つて、尙ほ僧は讀經を續けた。好專は、
「さらば」

と云つて、忽ち二三人の者をして彼の唐櫃を開かしめた。

(三二)

按擦法眼好專が手勢の者、二三人バラ〜と彼の唐櫃の傍に馳せ寄りて、閉させる一つを押し開き、中覆へして檢めたが、大塔宮の影も見えなかつた。されば彼等は今一つの蓋の開きたる方を見る迄もなしとて、一同ドツと引き上げて行た。此の時まで護良親王は

大般若經を擔がせられ、微塵動ぎもせず御身を忍ばせ給ひしが、御心の内は既に決し給ひて、御懷劍を抜き放ち、自ら御喉に當て給ひ若し彼等が此方の櫃を覆へし、

「此處に！」

と只一言聞き給はゞ、只一と突に御自害遊ばし給はんとして、親王の御命は實に風前の燈火の如くに危かつた。其の御心の中こそ、さこそと察し奉れば、いと哀れの極みであつた。

斯くて彼等が一度本堂を引き上げて、門の外に出づれば、親王はホツと息吐き經文の下より出で給ふた。此の時彼の僧は又もや大塔宮

に打ち向ひ、

「今彼等を欺きて、首尾よく門の外まで出すと云へども、未だ彼等遠く立ち去らず、今一度引き返へして探がさんも計り難ければ、今暫し御身を忍ばせ給へ。而して此度は此方の櫃へ」

と云て、彼等が中検めて覆へせし唐櫃の中に入れ奉り、ありし様に蓋を爲し、僧は又再び讀經に耽つて居た。

斯くて間もなく、一旦門の外まで出でし好專が勢は、

「彼の蓋開きたる唐櫃を検めざりしこそ心残りにて、實に怪しき唐櫃なれ」

と罵しりて、再び本堂に入り來り、彼の唐櫃を覆へし中檢むれば、大般若經のみがバラ／＼と落ち散りて、親王は在はしまさなて終た此の時按擦法眼は、

「大塔宮は在はしまさで、大唐の玄草三藏にて在はしませしよな」と云ひて、カラ／＼と打ち笑ひ、

「早や此の上探さん術もなければ今は詮も無し」

と云ひ、同勢を纏めて遠く引き上げたので、宮は不思議にも危き御命を救かつた。

斯くて宮は尙ほ暫し、此處の寺に忍び居給ひしが、彼の僧は又宮

の御前に出で、

「此度親王不思議にも危き所を逸れ給ひしは一重に親王の御威徳と併せて神明の加護せられしに候はんも、尙ほ斯くて此所に在はしまさん事のいと心許なく候へば、親王には暫らく此所を落ちさせ給ひ吉野の方に至り、山法師を御味方に語らひ給ひてこそ然る可くと存じ奉り候」

と申し上げた。

親王も今は實にもと思召されて、彼の僧光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡村三河守、武藏坊頼乘、村上彦四郎、同藏人、片

岡八郎、矢田彦七、平賀三郎以上十人を従へ、宮を始め奉り十一人の者皆柿の衣に笈を掛け兜巾眞深に冠り、田舎山伏が熊野參詣の出装に姿をかへ、大和國吉野郡十津川の郷に落ち行かせられた。

元弘二年夏の頃、十津川の郷士戸野兵衛は一族榮え、家富みて多くの武士を養ひ、兵馬を蓄へ、威勢四邊に振つて居た。此の頃彼れは今天下紊れて官軍は西に、賊軍は東に互に合戦を交ゆると聞き、益々兵馬を蓄へて何れにか従ひ功を立てんと、其の用意充分に整へて居つた。然るに官軍は笠置、赤城の兩城陥り、主上は隱岐に、護良、尊良兩親王を始め、官軍の重なる主將皆落ち散りて、何處に

か身を潜め、世は暫らく又平穩なりと聞き、彼は聊か手持ち無沙汰の體であつたが。又此の頃大塔宮護良親王は此處ら邊りに身を忍ばせ給ふと聞き、心密かに親王の行方を求めて居た。

或る日夏の夕は静かに暮れて、誰そか彼かやの夕間暮、十一人の山伏は十津川の郷に入り來り、戸野兵衛が館の門外に立つて案内を乞ふた。取次ぎの者出で來つて見れば、何れも只人ならぬ、立派なる山伏其處に彳ふみ、中より一人の者は進み出で、

「吾等は都なる聖護院の山伏に候が、此の度大峰より紀伊國熊野に參詣いたさんとする者にて候。而して今此の郷に來りて日暮る

れば何卒一夜の御宿願ひ候」

と申し述べた。取り次の者は此の由斯くと主兵衛に告げた。之れを聞いて主兵衛は自ら出で來り、見れば云ふに違はず、十一人皆立派なる山伏の其處にイみて、中にも一際目立ちて立派なる自づと尊く見ゆる山伏と、睨と眺めて戸野兵衛は、何か思ひ出づる事ありてか言葉もいと丁寧に

「それはくは、都なる聖護院なる山伏の修行者には、熊野參詣とか大儀に候。定めし御疲勞れも候はん。見苦しき處には候へども一夜の御宿仕れば、ゆるく御休息遊ばし候へ」

と云ひて、山伏の人々を奥に案内した。

(三三)

戸野兵衛は、己が館に十一人の山伏を泊め、心密かに思ふ様、

「此の頃世の噂に聞けるは、大塔宮護良親王は先き頃南都般若寺に於て、危き所を脱れ給ひ、何處へか落ち行きて此處ら邊りに御身を忍ばせらるゝとか、さて彼の山伏こそ親王が御味方の勇士姿を變へて山伏に出裝たる者なるよ、中にて一際目立てる山伏こそ、必定大塔宮護良親王にて在はしきさん」

と思ひて、尙ほ一行の様子に眼注がるに、其の夜山伏達が勤經の様

を打ち見るに、眞の山伏が勤經としては、いぶかしき節のいと多ければ、益々心に怪しみ、尙ほも眞偽を探らんと、己が女をして親王に近寄らしめ、それとはなしに様子を深く探つて居た。

然るに斯くとも知らず、親王は、戸野兵衛が待遇の厚きに暫し此の館にとゞまり給ひ、尙ほ兵衛が女の美しく、心榮え優しきにめで寵愛し給へば、彼の女も親王を深く慕ひ奉つた。

或る日親王は只一人庭に下り立たせ、彼方の木蔭に召ませ給へば兵衛が女は後を慕ひて御側に來り、

「喃客人、妾は端なくも君を慕へば、君深く寵愛し給へるが妾は未

だ、君が御身の上を知らず、眞實や君は都なる聖護院の山伏にて候か。とく御身の上を明し給はれ」

と云ひて下俯き、涙さしぐめば、親王は彼の女が心根を察し、そとろ憐れに思召され給ひて、

「汝が心さもあらなむ、今は隠さず汝に語り聞かせむ。世を忍ぶ身の山伏姿に出裝てどもまことや吾れは今上第三の皇子護良なるぞよさはれ此の事は、汝必ず固く他言せな」

と仰せらるれば、兵衛が女は驚きて、

「あら勿體なや、斯る尊き御方とも知り侍らねば、賤が身を以て愚

かしくも吾が君を慕ひまつり、あゝ妾は如何せむ、罪科の程も恐し、妾は自害して御詫び仕らむ、許させ給へ」

と己に懐劍引き抜きて自害せんとせしかば、親王は其の手を抑へ、

「汝はやまる事勿れ」

と諭し給へば、兵衛が女も今は自害を思ひ止まり、懐劍鞘にをさめた。

此の時彼方の木蔭より、主戸野兵衛現はれ出で、親王の御前に跪き、

「只今の御言葉は彼方にて拜承し、始めて親王の御身を知り申候。

斯る尊き御方とも知らず、今迄微臣が無禮、幾重にも許させ給へ又臣が卑しき身を以て尙ほ臣が女を斯く迄に御寵愛めさるゝ御心、臣が命を失ふも伴々に惜しき所に候はず、希くば臣が女を長く御側に召し仕へさせ給へ、臣必ず身を以て御味方仕らむ」

と申し上ぐれば。親王もそゝる兵衛が赤心に感じ給ひ、

「汝が心感するに餘りあり、幸ひに吾が爲めに力を盡くされよ」と仰せられた。

斯くて戸野兵衛は今や親王の御心に感激し、心悦び躍りて、一族の者を召し集ひ、尙ほ叔父竹原六郎を説きて御味方に加へ、尙ほ

又親王の令旨を四方に傳へて御味方の軍を語らひ、漸く數百騎を得て、官軍次第に盛んになつて來た。

此の頃熊野の別當定篇は、無二の武家方にて心を深く鎌倉に寄せ居た。

然るに定篇は、大塔宮が大和國十津川の郷に據つて兵を集め、諸國に令旨を下して勤王の軍を募り給ひ、戸野兵衛、竹原六郎なんどの一族、御味方仕り、勢ひ次第に盛んなりと聞いて大に驚き、
「こは今の内に大塔宮を召し捕り奉らねば、由々敷大事なり、速かに此の事鎌倉に注進し、御教書を以て親王を捕へ奉らむ」

と早馬の使を立て鎌倉に斯くと注進し、御教書を請ひ、親王を討ち奉れる者には莫大の恩賞あらんと言ひ觸らしたれば、附近の郷士等皆定篇が味方に従ひ、一旦御味方に加はつた者も次第に叛きて定篇に従ひ、竹原六郎さへ今は心を變へたので、親王はいと頼りなく思召された。此の時戸野兵衛を始め彼の十人の者共は、額を鳩めて凝議し、

「嗚呼悲しき事に候ものかな、未だ諸士勤王の心薄く、名利に赴いて賊軍に味方を爲すとは」

と嘆じた。然し斯くてあるべきにあらねば村上彦四郎進み出で、

「如何に歎くとも今は詮なし、只此の上は一旦此所を退ぞきて、吉野の山に向ひ、山法師を御味方に語らひ、彼處に於て旗を擧げん外に、今はいたさん事も候はず、生なか此所に止りて、定篇等が勢に討たれんには、最早や悔ゆるも詮なかるべし、早やく此處を落ち候はん」

と云へば親王を始め、其の餘の人々も、實にもと思ひ、親王は僅かに三十餘人を引きつれて吉野の山に落ち行かせられた。

(一三三)

大塔宮は三十餘人の手勢を率ゐて、十津川を立ち出で、吉野を指

して落ち行かれたが。此の時別當定篇が手の者共は、關所々々を固めて、無事吉野に入らせらるべしとも見えなかつた。

親王は漸く今、途中辛ヶ瀬の關まで來つた。此の時辛ヶ瀬庄司は多くの郷士、百姓を驅り集めて嚴重に備へ、今にも親王此處に見え給はば支え奉らんと待ち構へて居た。此の有様を見て親王は、

「いで敵の鳥合勢、此處を蹴破りて通り呉れん」

と心はやり給へど、敵は大勢味方は小勢、若し過ちありてはと傍へより赤松律師、親王の御袖を控へて、

「今大事の前の小事、斯る名もなき小人原と争ひて、若し尊き御身

に過ちあらば、それこそ由々しき御大事に候。此の所は如何にもして敵を欺き、無事に通られんこそ、策の得たる所に候。此の則祐之より庄司に會ひて、此の事を計らひ候はん。暫し之れにて御待ち候へ」

と此處を馳け抜け、關所の門に到り、聲張り揚げて、

「吾れこそ大塔宮護良親王が御味方にて、赤松律師則祐にて候が、關所を固むる大將芋ヶ瀬庄司殿に所用なあれば、いで見參して、事物語らむ」

と呼ばはつた。此の時芋ヶ瀬庄司は之れを聞き、親王が御身内なる

赤松則祐が、吾れに所用とは何事ならんと、其處へ出で來りて則祐に向ひ、

「拙者こそ芋ヶ瀬庄司に候が、吾れに所用とは何事にて候ぞ」と云へば、則祐は、

「さてこそ御身が庄司殿にて候か、拙者推參仕つたるは、吾が事は候はず、忝けなくも大塔宮二品親王の御使にて候。而して宮の仰せらるゝには、此の度親王吉野に入らせられんとして今此處にさしかゝれば、御身は熊野別當定篇に心を寄せ、宮を支え奉らんとするところを聞き召し、心痛くも憂れい給ひ、如何はせんと思ひ惑は

せ給へども、尙ほ御身が情け厚き武士なる事を聞き召し、此の度は
 武士の情け、一度此處を開きて通し給はゞ、宮は必ず御心に忘れ給
 はず、後に至りて必ず報ゆる所候へば、是非に通し呉れよと宮が
 切なる御頼みにて候」

と述べれば、流石に庄司もそいろ心に感激して、則祐に向ひ、

「窮鳥懷裡に入る時、獵人も之れを殺さずとか、今宮は尊き御身を
 以て、身不肖の卑しき者に對しての御頼み、宮は今窮鳥にして吾が
 懷裡に入る者なり、如何でか今は支え申さん。されども拙者一度別
 當定篇に黨し、用意整へて宮を待ち奉る事日あれば、只此の儘此

處を開き通し奉らん事、定篇に對しても本意なき事に候。され
 ば今宮の御身内にて名を知られたる者一兩名賜はるか、さらずば錦
 の御旗を賜はるか。然らば之を以て定篇に對して云ひ開くを得ん、
 斯くて宮をば此處を開きて通し奉らむ。則祐殿如何に候ぞ」

と云へば、則祐も暫し言葉詰まりて、
 「御言葉、實に然るべく候。されど之は暫く御待ち候へ」

と云ひて後へ引返し、親王及び其餘の人々に斯くと打ち語つた。
 親王は御心の内に彼等如き身卑しき者に、錦の御旗を遣はさんも實
 に榮えなき事、さりとて身内の者を例へ、一人二人なりとも失ふは

此の場合になす事忍びず、如何はせんと思ひ惑はせ給へば、此の時
光林坊尊玄進み出で、

「此の場合一人にても味方を失はん事、親王を守護し奉るに、味
方の勢の元氣衰へ候はん、尙ほ忠臣勇士は得るに難くこそ候。而
して錦の御旗は、例へ今彼れに與ふるとも、後に調へんこそさままで
難き事に候はず、例へ又御恥辱に候ふとも、大事の前の小事、後に
賊徒平定し、天下を取り返さんには、今日の御恥辱も何か候べき。
されば速かに錦の御旗を遣はされ、此處を通り越してこそ、然るべ
くと存じ奉り候」

と申し上た。

宮も實にもと思召されて、錦の御旗をば、芋ヶ瀬庄司に遣はされ
た。

庄司は之れを得て、大に喜び、三拜九拜して御旗ををさめ、關所
の庭に押し立て、軍兵を召し集ひ、之に諭して關所を開かしめた。
大塔宮を始め奉り、其餘の三十餘人の人々も、此の有様を眺
めては、心に無念の涙を呑み、

「何時かは此の恥辱を雪ぎ呉れむ」
と、思ひながらも其の儘此處を通り過ぎ、山の峰傳ひに辿り行き、

身を忍ばせて、吉野の方へ落ち行かれた。

跡に芋ヶ瀬庄司は、多くの軍勢を一所に集め、祝宴を張り、今は心ゆるみて、ホロ／＼と酔ふて居た。

(二四)

芋ヶ瀬の關所に風柔らかく吹き來て、庄司は親王より錦の御旗を賜はり、心欣然として酒の微ろゝに酔ひ、自ら起つて手拍子打ち、一さし舞はんとすれば過つて、盃を踏み潰した。此の時一人の山伏は今此の關所にさしかゝつた。

彼の山伏は密かに關所の内をさし覗けば、主庄司を始めとし、

數多の軍兵庭前に集まりて酒汲みかはし、歌を歌ひ、舞を舞ひ、笑ひさゝめく聲賑やかなれば、彼の山伏は不審に思ひ、尙ほも庭前に眼注げば、不思議や庄司が傍らに、錦の御旗翻翻として翻つて居た。山伏は愈々不審はれやらず、心密かに、

「さては大塔宮には、路を換へさせ給ひて此處を通らず、間道に出で給ひしを、庄司が勢の者共、後追ひ奉りて彼の御旗を賜はりたるものと見ゆるよ、して宮は如何なり給ひしならむ、事なう落ちさせ給ひてか」

と獨り私語き、尙も様子を窺へば、一人の軍兵此方に來る様子に、

山伏はそ知らぬ顔をして、出で来りたる軍兵に向ひ、

「これは大峰參詣の山伏に候が、何卒此處を御通し候へ」

と云ふた。此の時彼の男は、

「暫し御待ち候へ」

と云つて内に入り、庄司に斯くと告ぐれば、通せよとの事に、彼れは再び出で来りて、

「然らば御通り候へ」

と云つた。此の時山伏は通らんとして立止り、再び彼の男に向ひ、

「卒爾ながら、當關所には何事か事の起りて候か」

と問へば、彼の男は、

「さればでおじやる、今日大塔宮護良親王、三十餘人の手勢を率ゐて、此の所へさしかゝり候が、吾等が主人庄司殿、鎌倉殿の御教書に依り、宮が通らん事を固く支え申して候。此の時宮は、さらばと云ひて彼の御旗を賜はり、御命に換へて通り過ぎさせ候が、彼の旗こそ、其の宮が賜はりし錦の御旗にて候よ」

と云つた。彼の山伏は之を聞いて無念の憤怒はムラ／＼と心頭に浮んだが、尙ほじつと堪えて、彼の男に向ひ、

「さては彼の旗が、さばかり尊き錦の御旗にて候か、吾儕扁ねく諸

國に修行いたして廻り候へ共、未だ一度も斯る尊き旗を見ず、希くば生前死後の思ひ出に、熟々近より拜し度く候が、此の由庄司殿に御傳へ下さらぬか」

と云ふた。此の時再び彼の男は内に入り、庄司に斯くと告ぐれば、庄司は、

「然らば彼の山伏これに招ぎて見よ」

と云へば、彼の男は又出で來りて、山伏を伴ひ庭前に、庄司が傍らに來た。

彼の山伏は此の時ヅカ〜と、錦の御旗に近づき、手を伸べて旗

を取るより早く小脇に抱い込み、右手には隠し持つたる太刀引き抜き、辛ヶ瀬庄司をハツタと白眼み、

「汝卑しき郷武士の身にして、恐れ多くも大塔宮護良親王をば支え奉り、假令宮は御命にかへて御旗を賜はるとも、尊き錦の御旗こそ汝等が手に持つべきものに非ず。吾れ宮にかはりて此の旗を奪ひ去らん。斯く振舞はん吾が身こそ、眞實や大峰參詣の山伏にはあらで、大塔宮二品親王が臣、村上彦四郎義光なるぞよ。今こそ汝思ひ知れ」

と云ふより早く、大刀振り翳して只一討ちに庄司を斬て捨てた。之

れと見て群がり寄する雑兵二騎三騎、右と左に斬り倒せば、忽ち四邊に血汐は染みて流れた。此の有様を眺めて、敵の奴連恐れて近寄る者もなく、彦四郎は錦の御旗を奪ひ、悠々と立ち去つた。此の時腥き風は颯と吹き來つた。

斯くて彦四郎は錦の御旗を奪ひて、親王の後追ひ奉れば、程なくして宮に追ひ着いた。

此の時宮は彦四郎が錦の御旗を携へ來れるを見、いと不思議に思召されて、

「彦四郎、汝は如何にして其の旗をば得て持ち來れるや」

と仰せられた。此の時彦四郎は、有りし次第を物語り、宮に錦旗を御渡し奉れば、宮はホト／＼彦四郎が剛勇に感じ入らせ給ひ、尙ほ御喜びの涙流させ給ひて、

「適ばれ汝は猛き武士なるかな、汝只一人多勢の敵と戦ひ、芋ヶ瀬庄司を討ち果し、よくこそ旗を奪い返して來れり。護良殆ど感激の情に堪えず」

と仰せられた。其れより親王は彦四郎と共に三十餘人の御味方の勢を従へ、吉野の方に向はせ給ひ、其の夜は山中の辻堂に、冷き夢を結ばせられ、明くれば再び山路を辿りて吉野に向ひ、今漸やく小原

の里に近づかせられた。

此の時彼方より山樵夫二人、薪を負ふてトボく〜と来れば、平賀三郎之れを呼び止め、

「汝等は何處より来れる者なるか」

と問へば、彼の山樵夫は、

「吾等は小原の里より来り申しまいておざる」

と答へ、一同の姿を怪しげに打ち眺めた。

(二五)

平賀三郎は尙も、彼の山樵夫に打ち向ひ、

「小原の里まで未だ程遠きか。して如何なる路を行く可きぞ」

と重ねて問ふた。此の時彼の山樵夫は互に不審かしき眼輝かせて、

「さればでおざる。小原の里までは此の路を直ぐにお行きやれば、

早や程なうおざる……でも殿方は、若しや大塔宮様とお申さるゝ

方々にてはおじやらぬか」

と云つた。之を聞いたる人々は、互に眼見合せて心にソツと、

「ても不思議な山樵夫、若しや敵の間者にてはあらぬか」

と囁き合つた。此の時村上彦四郎進み出で、

「吾等はさる人々にはあらねど、大塔宮が、此處ら邊りに来りしど

噂にてもある事なるかよ」

と云へば、彼の山樵夫は、

「左様でおじやるか、殿方は大塔宮の御連中におざらねば、差し支へもおじやらぬが、若し左様な方々にておじやれば、そりや一大事でおじやる」

と云つた。之を聞いて彦四郎は、

「すりや何とな」

と問ひ返せば、山樵夫は、

「さればでおじやる、此の先き小原なる郷に玉置庄司と云へる鎌倉

方の武士、此の頃其處に關所を構へ、逆茂木引いて、宮が今にも此處へおじやれば、御首級賜はらんとか云ふて、いかい騒ぎておじやる」

と云つて、其の儘山樵夫は行き過ぎた。

跡に大塔宮を始め人々は、

「是は如何なすべき事に候ぞ」

と互に不安の眉をひそめて私語き合つた。此の時片岡八郎、矢田彦七なる二人の者は、宮の御前に進み出で、

「今此處に來りて引き返さん事もならず、さりどて敵は衆にして味

方は小勢、此處を蹴破りて通らん事も心許なけれど、何時迄此處に躊躇ひてあらんも、却つて敵に見附けられ、先を越されなばそれこそ由々しき御大事にて候。されば之より吾等兩人、玉置が許にいたりて暫らく彼れに頼み、此處を開かせて吉野に入らせ給へ。若しならざる時は早や御覺悟候ふて、此處の處は飽くまで斬り破り必ず一方に血路を開きて吉野の方に落ちさせ給へ。さらば之より吾等兩人、玉置が許にいたりて頼みて見ん、此處にて暫く御待ち候へ」と云つて二人は、バタ／＼と馳せ出した。跡に人々は互に口を黙し吹き來る風に木の葉がサラ／＼と鳴るのみであつた。

二人は小原の關所に馳せ來りて、門の傍らに寄り、「吾れ等は大塔宮二品親王が味方の者に候が、暫らく玉置殿に對面して、御頼みの候」と呼ばはつた。玉置庄司は之を聞いて、不審に思ひながらも出で來り、二人の者に對面した。此の時片岡、矢田の兩人は、此の度大塔宮護良親王、吉野の山に入らんとして、今此處にさしかゝれど、玉置が勢今此の關所を固むと聞き召し、宮は玉置が情けに依つて、事なく此處を通らせ給はん

とし、一重に玉置が武士の情に頼まん事を申し述べた。

されど玉置庄司は仲々聞き入れなかつた。却つて軍兵をさし向け親王を捕へ奉らんとして遽かに、下知を下して立ち上つた。

此の有様に、片岡八郎、矢田彦七の兩人は、カツと怒り、

「最早やこれ迄なり」

と云ひ乍ら、大刀引き抜いて、群がる敵の中に斬り入つた。

忽ち四邊は騷擾の聲喧しく、慘劇の血汐はサツと迸しり流れた。

此の時何處よりか飛び來りし矢は、八郎が胸深くグサツと立てば血に染みて八郎は倒れた。之を見て彦七馳け寄れば、八郎は、苦しさ

息をホツと吐きも敢えずして、

「吾が身は斯く深傷を負ひたれば、所詮命は候はず、されば御身は此の儘吾れを捨て置きて、早やく此處を立ち退きて宮に危急を告げ候へ。とくく」

と云はせも果てず、息絶えた。

矢田彦七は、今は之れまでと思ひ、一方を斬り開き、血刀ひつさげ、バラ／＼と宮の御前に馳せ戻つた。親王を始め人々は此の有様を眺めて、ハツと驚き、親王は、

「此の有様は如何なしつるぞ」

と仰せらるれば、彦七は血刀突いて、地上に跪き、
 「今は早や之れ迄に候ぞ。とく御覺悟候て合戦の用意ないたし給へ、今にも此處へ玉置が勢押し寄せ候はん」
 と申し上ぐれば、人々も、
 「さては」

と驚き、俄に身支度をいたせば、風は頻りと木枝に戦いて居た。

(二六)

小原の郷の北、松原に今風騒がしく、太刀打ち合ふもの響き、
 矢叫びの聲聞ゆるは、大塔宮護良親王が三十餘人の手勢の兵と、玉

置庄司が五百餘人の軍勢と入り亂れ攻め戦ふのであつた。

兩軍互に打ちつ打たれつ、暫しが間勝敗も容易に決せざりしが、宮が手勢の者共は敵の大軍に次第に打ち惱まされ、三十餘人も次第々に討たれたれば、親王も早や御覺悟あり、親ら大刀おつとりて、敵の雑兵一人二人を斬り捨てれば、御身にも又數ヶ所の傷を受けさせられた。尙ほ宮は少しも怯み給はず。御身に血を浴びて太刀振り翳し、敵を防ぎ給へども、敵は大勢少しも怯む様子なく、新手をさし替へさし立て、攻め戦へば、今は宮を守護し奉る者も十數人に打ちなされ、今は宮の御上も危うくこそ見えた。

此の時麓の方より、ドツと関の聲聞ゆれば、聽て赤旗二流、颯と吹き來る風に押し靡かせて、二百餘人の鎧武者、貝太鼓を吹き鳴らして堂々と押し寄せて來た。

此の有様に、敵も味方も只アツと呆れ、暫し合戦もとまつた。

此の時彼の鎧武者の中より、一際眼立て美しく鎧ひ、連錢革毛の馬に跨りて、陣頭に現はれ、大音聲に、

「玉置が勢の奴原よつく聞け、吾れこそ紀伊國の住人長野瀬六郎義兼、只今大塔宮が御味方に馳せ加はり、汝等無道の賊兵原、只今馬の蹄に蹴散し呉れん」

と呼ばはれば。續いて現はれたる一將は、

「吾れは長野瀬六郎が弟、同じく七郎義行、いで敵の奴原見參」

と呼ばはり、兄弟馬の頭を立て並べ、二百餘人の軍兵を従へて、敵の陣中眼蒐けて、さつと突き入れば、敵は左右に蹴散らされ、前後に斬り伏せられ、瞬く内に討ち滅ぼされ、殘兵は僅かに身を以て脱れ落ちた。

今悉く敵の軍勢は落ち散つて、合戦全く止ければ、此の時長野

瀬兄弟は、親王の前に出で、跪き、

「いと御危く見え候折り柄、吾等兄弟幸ひにさしかゝり、御身を救

ひ奉り、恙なき御顔を拜する事、吾等が喜び、何ものか之れに如く事候はず」

と申し上ぐれば、親王はいたくも打ち喜ばせ給ひて、

「汝護良が危き所を來り救ふ。汝等兄弟が忠義の程、只感するに餘りある者なるぞ、吾が喜びも何事か之れに及ばんや」

と仰せられて、御涙をハラ／＼と落し給へば、長野瀬兄弟を始め、並居たる者皆感激して涙に鎧の袖を濕ほした。

此の時風は颯と吹き來れば、松籟微かに、梢に響いて居た。

之れより護良親王は、長野瀬兄弟が案内にて、吉野に入らんとし

給ひしが、熊野別當定篇が手の者共、途に遮ざり奉りて、吉野に入る事能はず、一旦紀州榎野城に入らせられた。それより親王は諸國に令旨を下し、軍兵を召し尙野伏共を語らひて味方となし、總勢千餘人を得給ふた。

此の頃親王は又人を使はして、楠木正成と互に謀を通じ、共に賊軍滅亡を計り給ひ、正成漸く再び旗を擧げて赤坂城を恢復し、勢ひ又振ふと聞し召し、親王は俄かに兵を率ゐて、吉野の山に入らせられた。

吉野の山に入らせられてより、護良親王は山法師を語らひ、御味

方に附け、尙は諸國の兵を召し給へば、御味方に馳せ集ふ者、五騎十騎、百騎二百騎と彼方、此方より來り集まり總勢三千餘人となつた。

斯くて吉野の山に高く錦の御旗を翻へし、櫓をかき並べ、堀を廻らし、逆茂木を引いて、備へを固め兵器を集め糧食を貯へ、合戦の用意充分に整つた。

斯くて今吉野の邊り官軍の勢ひ、次第に草木を押し靡びかせて來た。

(二七)

赤坂落城後、金剛山の奥深く千早なる所に、此の頃身を潜め居る武士が居る、彼こそ楠木多門兵衛正成であつた。又此の正成が隠れ家に屢々忍びて訪れて來たる人々には正成が弟正季、和田正遠、恩地左近等の面々が居た。そして彼等は、様々に姿をかへ、身を扮して、鎌倉六波羅の様子を探り、密かに味方を語らひ、又大塔宮の御消息も探りて、使を送り共に謀を廻らし、再び旗を擧ぐるの機を伺つて居た。

斯くて正成は此の山奥に身を忍び、多くの間者を出して六波羅及び鎌倉の様子を探り、赤坂城の狀況を探らしめた。又弟正季、和

田正遠、恩地左近等と寄り／＼協議を凝し、附近の味方を語らひ、密かに再度旗擧の機を伺ふ折柄、或る夕、一人の旅人は金剛山の奥深く、千早なる此の正成が隠れ家に身を忍ばせて訪ね來つた。そして正成に打ち向ひ、

「殿！六波羅にては此度主上を隠岐に、尊良親王を土佐に、宗良親王を讃岐へ遷し奉り、又笠置赤坂兩度の合戦に落ち給へる公卿、又先頃六波羅勢都へ亂れ入たる際、捕へられたる公卿にて尹大納言師賢卿は下總へ、萬里小路藤房卿は常陸へ、弟季房卿は下野へ、又聖尋僧正は但馬へ流されておじやる。又源中納言具行、藤原中納

言資朝、別當藏人俊基、平成輔の諸卿及び足助次郎重範殿に於てはいづれも斬られておじやる。其餘の公卿武士も皆それ／＼、或は流され或は斬られておじやる」と云つた。之は疑ひもなく楠木の間者の者が歸り來たつての注進であつた。

此の頃赤坂の近郷、八尾の別當顯幸が館に於ては、豫ねて赤坂城の主楠木と領土の争ひより、幾度か戦ひしが毎も打ち勝つ事能はざりしに、會々鎌倉の大軍赤坂城に押し寄せ來りしかば、別當顯幸は鎌倉勢に味方を爲し、赤坂城遂に陥り正成討死せりと聞きたる彼れ

は、最早や敵なく心を安んじて居た。然るに或る日一人の旅の武士が訪ねて来て、主顯幸に面會を求めた。此の時彼の武士は顯幸に向ひ、

「サテ顯幸殿、吾儕を何處より來りたる者と思召さる、吾儕は楠木多門兵衛正成が使ひの者でおじやる」

顯幸は驚いて、

「ナニ！正成殿よりの使者とな、正成殿は赤坂落城と共に討死した筈でおじやらぬか」

彼の武士は微笑を洩しながら、

「さればでおじやる、彼の赤坂落城の砌、吾が殿正成は討死の體にて、實は密かに身を落ち延びて今金剛山千早に籠り、再び合戦の用意しておざる」

別當顯幸は益々驚き、

「ナニ！では正成殿未だ討死せずして再び合戦の用意しておじやるか。して使者の用事は何事でおじやる」

此の時彼の武士は愈々落ち着き、

「サテ顯幸殿お聞きやれ。吾が殿楠木と御身とは、領土の争ひより度々合戦いたし候が之は私の軍でおじやる。然るに今度吾が殿

楠木は畏くも主上の勅命を奉じ鎌倉を打ち滅ぼさんとする、之れ勤王の軍でおじやる。而して吾が殿楠木は謀を以て屢々鎌倉の大軍を打ち悩ますと雖も、未だ運到らずして遂に赤坂城陥り、今千早に籠る者にて候。されど再び旗を挙げ軍を起さば、諸國勤王の士馳せ集り、鎌倉を滅ぼす事必定におじやる。して吾が殿楠木の仰せには、別當顯幸殿とは隣郷の好み、互に舊怨を捨て、私の合戦をやめ、共に勤王の軍を勵み、功を官軍に建てんとするが顯幸殿には如何思召さるか。若し飽くまでも私憤の爲め戦はんと仰せらるれば、正成速かに手勢を率ゐて顯幸殿に見えむ。若し私憤を捨て勤王

の御味方仕り功を建てられなば、護良親王の御内意にも顯幸殿別當職の位にも上げせんとの事でおじやる。顯幸殿御返答如何でおじやるか」

と静かに説き、然も若し否と云はば、一打ちに打ち果さん氣勢をも示し、尙ほ様々に説き諭して遂ひに別當顯幸を味方の軍に引き入れた。彼の武士は楠木が勢の勇將恩地左近であつた。

(二八)

斯くて千早なる楠正成は人を遣はして勤王の士を説き味方の軍勢を語らひ、此の程漸く八尾の別當顯幸も手勢二三百を引きつれて

味方に参り、其の外五騎十騎馳せ参じ、又護良親王が熊野、吉野、高野等にて募りたる僧兵も來り集り、其の勢五百餘騎となつた。されば正成は再び機を見て旗を擧げんとし、密かに間者を出して赤坂城の様子を探らしめて居た。

六波羅にては楠木が赤坂城陥りてより、跡に湯淺入道定佛を入れ置いて守らして居た。湯淺定佛は赤坂城に入り、破れたる所を繕ろひ、塀を嚴重に廻らし、逆茂木を引き、備へ固く守つて居た。そして此の頃楠木正成未だ死せずして、金剛山千早に籠り、數百騎を集め再び旗を擧げ此の城に押し寄せんと聞き、益々城を固く守り、

又俄かに兵糧の用意をせんと、紀伊國阿瀬川より人夫數百人に兵糧を運搬させ城へ入れんとした。

斯くて紀伊國阿瀬川の百姓は大勢集つて糧食を俵に入れ、之を赤坂城に運ばんとして非常な混雜であつた。此の時何處からともなく一人の旅人は來たつて、之等の百姓に打ち向ひ、

「大勢人が集つて何事かおざる、して此の澤山の俵は何でおざる」
「此れは皆米でおざるがの、そして此の大勢で皆之を運ぶのでおざる」

旅人は尙ほ、

「して之は何處へ運ぶのでござる」

此の時一人の百姓は其處へ出て来て、

「之れは旅の衆には知らぬ事でおざらう。此の米は皆兵糧米でおざる、そして此の大勢の者が集つて、今から河内赤坂のお城へ運んで行くのでござる」

之を聞いた彼の旅人は何か想ひ當る事あると見え、頻りと打ち垂頭いて居たが、其の儘何處ともなく立ち去つた。彼の旅人も又楠木が間者の者であつた。そして彼れは急いで金剛山なる千早に参り、斯くと正成に知らせた。正成は何か考へる所あつたと見え、俄かに

總勢を集め、千早を繰り出した。そして阿瀬川の百姓等が兵糧を赤坂城へ運搬せんとする要路を襲ふて悉く其の兵糧を奪ひ取つた。百姓共は周章て狼狽めいて阿瀬川に逃げ歸つた。跡に正成は手勢五百人の内、三百人が程の人数を皆百姓の姿に出装たせ、彼の俵には太刀物の具を入れ替させ、馬に乗せて赤坂城の附近まで、兵糧を運搬する體にして行かせた。そして彼等が城の附近まで近づいた頃、残れる二百餘人の勢を率ゐて、俄かに菊水の旗を押し立て、鐘太鼓を打ち鳴らし、彼の百姓に出装たせたる一隊を襲い、兵糧を奪はん氣勢を示した。彼の一隊は馬を牽ゐて急ぎ城の方に逃げ他の一手の

勢は其れを追ひかけて、愈々城に近づいた。

城中に於て湯淺定佛は此の有様を眺め、

「スワ敵勢が起つて兵糧を奪はんとするぞ、者共早く敵を追ひ拂へ敵に兵糧奪はするな」

と下知を下した。之を聞いたる城兵は、

「スワこそ敵よ」

と武具おつ取り、城門サツと開き、関の聲を作つて打つて出でた。

此の暇に彼の百姓に出装たる楠木の一家は悉く城内に入り込み、急ぎ俵の中より武具取り出して身に着け、ドツと関の聲を揚げて戦

を挑み、又外よりも激しく攻め立てければ、城兵は内外に敵を受け戦ふべうもなくして城は遂ひに陥つた。

斯くて元弘二年四月三日 赤坂城は楠木の手に戻されて、菊水の旗再び金剛山の麓、赤坂なる城樓に翻り、勤王の軍また奮はんとして春の風は静かに暖かく吹き來つた。

(二九)

赤坂城の樓上高く楠木が菊水の旗再び翻へつてより、勤王の軍は次第に勢ひを回復し、正成は尙ほ附近に潜める湯淺が殘黨を打ち滅ぼし、兵を進め。元弘二年五月十七日には攝津國天王寺の邊りまで

も進路し、其の勢も既に千餘騎に上り、攝河の地に漸く勤王の旗風は押靡かんとして來た。

鎌倉にては主上及び尊良、宗良兩親王を遷し奉り、尹大納言師賢以下其餘の公卿武士を或は流し或は斬つて、今は天下に虞るゝ所もなく、再び横暴を極め、執權高時、管領高資を始め、其の他大名の面々、皆太平を謳ひ、華奢に流れ、六波羅にては仲時、時益の兩探題政を省みずして又安逸に耽つて居た。たましく楠木正成金剛山の奥深く千早なる所より起つて再び赤坂城を奪ひ返し、尙ほ進んで攝津天王寺の邊りを侵し、遂には都にまで攻め上らん由を聞

いて幕府の軍は一方ならず驚いた。そして六波羅にては遽かに隅田通倫、高橋宗康の兩人に五千の軍兵を興へ正成を來り撃たしめた。此方、正成に於ては通倫、宗康五千の勢を以て押し寄すると聞き千餘人の味方を四隊に分ち、一手の勢三百餘人、悉く力弱き雜兵を以て編成し、此の勢に渡邊を守り扼さしめ、其餘の三隊は悉く附近の地に伏せしめて置いた。

五月二十一日の曉、朝風未だ寒く五千の六波羅勢は、旗指物を押し立て、貝太鼓を吹き鳴らし草木も押し靡かせて渡邊橋の袂まで押し寄せた。此方は橋を扼せる三百の楠木勢は、斯く見るより各々